神戸市看護大学

地域連携教育・研究センター

2020 年度

実績報告書

刊行に際して

2020 年度は、公立大学法人神戸市看護大学として再出発してから 2 年目となりました。「市民との連携・交流による、地域の保健医療への貢献の推進」を法人の中期目標の一つの柱として、2020 年度もいろいろな地域連携活動をすすめる予定でした。しかし、皆様ご存じのとおり、新型コロナウイルス感染症の影響で、地域連携活動の中にはあきらめざるを得ないものもありました。人と人との交流が妨げられ、教育ボランティアの皆様のご協力を得てきた授業もいくつかできなくなりました。「まちの保健室」等を楽しみにされていた市民の皆様や医療専門職の皆様、地域連携活動を準備していた教職員にとり、大変残念な 1 年になりました。

しかしながら、新しい地域連携活動が開発された年でもありました。本学は、2020 年 3 月中旬からオンラインチームを作り、教職員が一致団結して準備をしたため、学生の授業開始日程をほとんど遅らせることなくオンラインで始めることができました。オンラインを使用したことがない教職員が、チームのサポートでぎこちなく講義をはじめましたが、いろいろな工夫を重ねるうちにその媒体に慣れて、そのうちそれを活用した地域連携活動がはじまりました。これらの地域連携活動については本実績報告書に記録しておりますが、例えば、オンラインによるコラボカフェ、専門職講座、大学院生を中心としたプレパパプレママセミナー等です。いろいろな取り組みが本実績報告書にありますので、ぜひ新しい地域連携活動をご覧いただければと思います。2021 年度には神戸市から予算をいただき、市民の皆様への健康教育や在宅ケアなどの専門職への研修等、オンラインを活用していくプロジェクトが始まります。地域連携活動によってはオンラインの向き不向きもあろうかと思いますので、様々な角度からのご意見やコメントをお寄せいただきますと幸いです。

本実績報告書には、国際交流に関する活動もあります。2019 年度、2020 年度とも、学生はワシントン大学やダナン大学に研修へ行く機会を失いました。大変残念なことです。しかし、2020 年度はそれに代わってオンラインを使用したダナン大学の学生との交流授業や、ワシントン大学のコロナ禍の教育体制に関する講演会を開催し、大変好評を得ることができました。本学の国際化も新しい局面を迎えています。

さて、2021 年度から、地域連携教育・研究センターはその機能を拡大して、「いちかんダイバーシティ看護開発センター」として再出発すべく準備しています。本実績報告書内の活動は継続しつつ、加えて市民の皆様への健康支援や、保健師、看護師、また在宅ケア従事者への支援、国際的活動等、オンラインなども活用しながら地域連携活動を充実してまいります。新型コロナウイルス感染症の影響を超えて、本学はこの経験から学んだことを大切にしながら、多様なニーズをお持ちになる市民の皆様のお健やかな生活に少しでも役立つ大学を目指して新たな発展に向けて努力してまいります。今後ともよろしくご協力いただけますようお願い申し上げます。

公立大学法人　神戸市看護大学
学長　南　裕子

目次

地域連携教育・研究センターの概要 ……2

I. 地域貢献活動

地域貢献活動の概要 ……4

活動実績……5

まちの保健室 ……5

コラボカフェ ……15

プレパパ・プレママセミナー……25

竹の台ふれあいまつり……26

命の出前講座……26

西区ヘルスアップ作戦……27

トライやる・ウィーク……28

こうべ生涯学習カレッジ（コミスタ神戸）……28

ユニティ講座 ……28

看護専門職講座 ……28

出前健康講座 ……32

HAT 神戸復興住宅における出前講座 ……33

フレイルチェック事業……33

もの忘れ看護電話相談……34

もの忘れ看護相談オンラインミニ講義……36

II. 教育・研究活動

教育 · 研究活動の概要 ……39

活動実績……39

教育ボランティア導入授業……39

教育ボランティアを導入した健康生活支援学実習 …… 40

教育ボランティアニュースレター……42

教育ボランティア交流会……43

学生ボランティアの活動状況とその支援 ……43

III. 国際交流活動

国際交流活動の概要……51

活動実績 ……51

英語ネイティブ教員による English Lunch time……51

米国ワシントン大学によるオンライン講演会……51

ベトナム・ダナン大学とのオンライン交流イベント……51

別添資料……54

関連研究業績……59

地域連携教育・研究センターの概要

地域連携教育・研究センターの概要

2009 年度、地域社会における健康支援の推進と、教育・研究における地域との交流を発展させることを目的として、地域連携教育・研究センターの前身である「神戸市看護大学健康支援援地域連携センター：通称コラボセンター」が開設されました。さらに、2012 年度には、国際・地域交流委員会を統合して国際的な交流活動も含めた「地域連携・国際交流センター」となりました。2013 年度から 2017 年度まで行われた「文部科学省地（知）の拠点整備事業（Center of Community）」が終了するのを期に、2018 年度から現在の「地域連携教育・研究センター」と名称替えしました。

さて、2020 年度を持ちまして、「地域連携教育・研究センター」は「いちかんダイバーシティ看護開発センター」の一グループに位置づけられます。体制は変わりますが、これまでどおりの社会貢献活動を開発し、地域の皆様へお届けしていくことなります。

I. 地域貢献活動

地域貢献活動の概要

2019 年度は本学が法人化し、2020 年度がその 2 年目となりました。「地域連携教育・研究センター」は 3 年目となり、教育ボランティアの皆さんと学生、教員が共同で学習する「コラボ教育」や、保育士と教職員が連携した子育て支援の場である「コラボカフェ」、兵庫県看護協会と連携している「まちの保健室」、命の感動体験、看護専門職講座、ユニティ公開講座等、様々な社会貢献活動が予定されていました（表１）。

新型コロナウイルス感染症の影響により、4 月、5 月は学生もオンラインによる授業になり、大学内で学生を見かけることができなくなりました。2020 年 4 月から 5 月は教職員も在宅勤務となり、第 1 回地域連携教育・研究センター運営委員会もオンラインで行われ、多くの活動は中止せざるを得ない状況になりました。しかし、6 月末に会議室での委員会が開催された際に、教育ボランティアの方へニュースレターをお届けする事をはじめ、「まちの保健室」の一部再開、「コラボカフェ」のオンライン開催案などを決めました。「まちの保健室」に関しては、2020 年度に神戸西部支部で再開したのは本学だけだったと聞いています。また、兵庫県訪問看護ステーション連絡協議会と連携して、訪問看護師の方に新型コロナウイルス感染症予防や、心理的サポート等の研修を企画し、8 月に看護専門職講座がオンラインで開催されました。安全な環境で学生の教育を行う工夫を、慣れないオンラインなどを使用して行いながら、地域の皆様への社会貢献も再開し、教職員一同、毎日引きおこる新しい課題のために駆け足をしているような日々だったことを思い出します。そのような中で実施された、社会貢献活動がこの実績報告書に記されております。

表１　2020 年度地域貢献活動一覧と実施状況、事業担当者

地域貢献活動		実施状況	担当者
まちの保健室	健康支援	「生活体力を測ってみませんか」のみ実施	岩本、山下、藤岡、遠藤、保健師課程４年生
	子育て支援	実施	二宮、半田、清水、山本
	こころと身体の看護相談	実施	船越、山岡、岩﨑、坂口
	もの忘れ看護相談	実施	坪井、石橋、秋定、西村
	まちの保健室運営会	実施	丸尾、石橋、半田、山下、吉川、片山、池田、野寄、花井、山本
コラボカフェ		実施	半田、丸尾、水川、井上（ち）、山下、片倉　保育士：袴田、池本、塚本、吉田
プレパパ・プレママセミナー		実施	高田、嶋澤、井上（り）、比名、岩﨑、蚊口、井上（ち）

竹の台ふれあいまつり	実施	高田、嶋澤、井上（り）、比名、岩﨑、蚊口、井上（ち）
命の出前講座	実施	井上（り）
西区ヘルスアップ作戦	参加なし	
トライやる・ウィーク	中止	
神戸生涯学習カレッジ (コミスタ神戸)	中止	
ユニティ講座	中止	
看護専門職講座	実施	丸尾、水川、片倉
出前健康講座	中止	
HAT 神戸復興住宅における健康講座	傾聴に活動変更	池田、畑中、後藤
フレイルチェック	実施	岩本、山下、藤岡、遠藤、保健師課程 4 年生
もの忘れ看護電話相談	実施	坪井、石橋、秋定、西村
もの忘れ看護相談オンラインミニ講義	実施	坪井、石橋、水川、秋定、西村
事務局		中野、武藤、宮本、丸山

活動実績

①まちの保健室

神戸市看護大学「まちの保健室」（以下、本学「まちの保健室」）は、兵庫県看護協会神戸西部支部と連携を図りながら 2005 年 12 月から継続して実施している。地域住民を対象者として、出産・子育て、生活習慣病やこころの健康、介護等、健康に関する様々な健康上の課題に、看護教員が相談に応じることで、地域住民の健康維持・増進を目指すことを目的に活動している。現在、子育ての保護者とその子どもを対象として、健康相談や子どもの発育測定、参加者間の交流促進を支援する「子育て支援」、地域住民一般の方々を対象にした「健康支援」、こころの悩みを抱えている方を対象に看護相談を行う「こころと身体の看護相談」、もの忘れや認知症に関する不安や困りごとへの支援を行う「もの忘れ看護相談」の 4 拠点が活動している。

①-1 健康支援

○概要

2020 年度の「健康支援」に関する講座は、新型コロナウィイルス感染症の感染拡大状況を受け、表 2 の通り「生活体力を測ってみませんか？」の活動のみの実施となった。

表２　今年度の開催状況

回	日程	テーマ	参加人数			スタッフ数			
			計	内訳		計	内訳		
				男	女		教職員	学生	住民ボランティア
1	5 月 21 日	排尿の諸症状とケアについて～糖尿病との関連～	新型コロナウィルス感染症の拡大状況を受け中止						
2	6 月 12 日	熱中症と脱水症～体験談からのお話～							
3	10 月 1 日	訪問看護 Part.5 在宅療養とこころの健康							
4	10 月 30 日	生活体力を測ってみませんか？	35	12	23	27	7	20	0
合計			35	12	23	27	7	20	0

○「生活体力を測ってみませんか？」の活動内容

日程：2020 年 10 月 30 日（金）13:30～16:00

場所：神戸市看護大学　体育館

参加者数：35 名

本企画では、本学の教員や保健師選択課程の学生が参加者の身体計測や体力測定を行い、測定結果をもとに各参加者への健康づくりについてアドバイスを行った。参加者は血圧測定と問診を受けた後、ストレッチを行い、身長、体重、体組成、握力、足指力、長坐位や開眼（閉眼）片足立ちの測定を受けた。今年度は、新型コロナウイルス感染症感染症予防対策を行った上で実施した。具体的な感染対策として、受付方法を完全予約制に変更したり、例年より測定項目を少なくし比較的短時間で測定を終えることができるようにしたり、実施者及び参加者がマスクの着用や手指消毒、機器の消毒を随時行ったり、会場となる体育館の換気を徹底して行ったりするなどの工夫を行った。

これらの感染症予防対策への工夫から、会場内が混雑することなく、また参加者はマスク着用や消毒に大変協力的であった。感染症予防対策に対して不安という意見も特にみられなかった。終了後に参加者からは、「体の状態を知ることができてよかった」、「自分の体を振り返るきっかけになった」、「毎年開催してほしい」などの前向きなご意見を多数いただいた。アンケートからは、全ての参加者が本内容に対して「とても満足」あるいは「まあ満足」と答えたことから、参加者にとって満足できる内容であったと考えられる。一方、「測定方法を増やしてほしい」というご意見もあった。今回の参加者は約半数が過去に本企画に参加経験のあるリピーターであることから、本企画の需要は本学周辺の地域で高いことが伺える。いただいたご意見を踏まえて、感染症予防対策を踏まえてどのような形で実施ができるか次年度に向けて検討していきたい。

○評価と今後の課題

今年度は、新型コロナウイルス感染拡大状況を受けて「健康支援」に関する活動は１つしか行うことができなかった。理由として、新型コロナウィルス感染症の拡大状況に変化が伴うこと、開催にあたっては兵庫看護協会西部支部や本学の感染症対策会議の方針および新型コロナウィルス感染拡大に伴う活動制限のガイドラインに照らし合わせながら行う必要があり、参加者募集を行うタイミングが難しかったことがあげられた。

感染状況が落ち着いた 10 月に開催できた「生活体力を測ってみませんか？」では、例年よりも参加者の上限を設け、参加者の動線を明確にする等、感染症対策を十分に講じた上での実施となったが、参加者から感染に伴う不安が聞かれることもなく、満足度の高い内容であった。今後も、本学が実施する「まちの保健室」として、テーマや会場設定等を工夫し、新型コロナウィルス感染症の拡大状況に応じた対応をおこないながら、健康支援を発展させていく。

①-2 子育て支援

○概要

地域における育児支援の場を提供する取り組みとして、2006 年から実施している。子どもに関する相談を行うとともに、参加した親子同士の交流が図れる機会を提供することを目的として年 6 回、実施してきた。今年度も同様に実施する予定であったが、新型コロナウイルス感染症の感染拡大状況を踏まえた上で、下記のとおり開催を中止したり、オンラインでの相談対応に切り替えたりするなど、開催方法を変更して開催した（表 3）。

○活動日（下記日程にて 13 時半～15 時半で実施）

表 3　今年度の活動状況

年	月　日	活動
2020 年	5 月 14 日(木)	新型コロナウイルス感染症の 拡大状況を受け中止
	7 月　2 日(木)	
	9 月 10 日(木)	
	11 月 19 日(木)	オンラインでの子育て相談の実施 （予約制、一部、対面相談の実施）
2021 年	2 月 18 日(木)	
	3 月 11 日(木)	

○運営

オンラインでの子育て相談の実施では、事前の予約を受けてオンラインでの相談を受けられるように Web 会議ツールを使用する体制を整えた。予約状況に合わせて小児看護学分野の教員 3 -4 名で対応することにしたが、相談希望者がおらず実施には至らなかった。また、オンラインでの相談は困難だが相談したい、という希望があったため、感染に留意しながら個別に対面相談を実施した。

○参加状況

今年度の参加者数は下記のとおりである。

・11 月 19 日（木）：参加者なし
・2 月 18 日（木）：1 名（祖母）、対面相談実施
・3 月 11 日（木）：参加者なし

○評価と今後の課題

今年度は、新型コロナウイルス感染拡大に配慮して、オンラインでの子育て相談を試みたが、予約制であることや Web での相談にはなじみがなかったため、利用者がほぼいない状況であった。しかし、オンライン相談は困難だが話を聞いてほしい（相談したい）という利用者のニーズに、柔軟に個別に対応できたことは、コロナ禍の状況であるからこそ、より必要なことであったと考える。次年度は、引き続き新型コロナウィルス感染症の拡大状況に留意した上で、状況に応じて対面での相談の実施についても検討していく。

①-3 こころと身体の看護相談

○概要

「こころと身体の看護相談(以下、看護相談)」は、心身に不調のある方とそのご家族が気軽に相談できる地域の場および精神看護専門看護師を目指す大学院生の教育の場として 2007 年 6 月より開催している。相談を担当するのは、看護師免許を有し、精神看護学を専門とする教員及び大学院生である。広報活動として、神戸市看護大学前掲示板、ホームページへの掲載、大学共同利用施設（ユニティ）内掲示板、大学周辺地域にある商業施設や診療所等の掲示板等への掲示と大学所在地の自治会を通じた回覧をおこなっている。

○活動日時と運営

毎月 1 回、12 人／回の相談枠で開催している。相談時間は一人当たり 40 分で、毎週木曜日（都合により曜日の変更有）の 13 時 30 分～14 時 10 分、14 時 20 分～15 時、15 時 10 分～15 時 50 分、16 時～16 時 40 分で行った。相談は予約制であり、平日の 9 時～15 時の間に大学の事務局に電話をする、来談時に次回の予約を取るという 2 つの方法をとった。相談は、大学共同利用施設の会議室や講義室をパーテーションで区切ってプライバシーを確保したブース内で、個別に実施した。

今年度は新型コロナウイルス感染症対策として、相談に来られた方の体温測定、体調確認、手指消毒とマスクの着用を徹底した。また、会場の換気とソーシャルディスタンスの確保を行った。広報用のポスターに感染症対策についての説明を追記した。

○実績（表 4、5）

2007 年 6 月から 2021 年 2 月末現在の開催回数は 156 回となった。新規相談件数は、2014 年度 25 件、2015 年度 13 件、2016 年度 16 件、2017 年度 7 件、2018 年度 2 件、2019 年度 13 件、2020 年度 16 件あった。

今年度の相談件数は 59 件、その内訳は新規相談 16 件、一旦終結していたが再開した相談 6 件、継続相談 37 件であった。65 歳以上の相談者は 47%で、そのうち男性は 10%、女性は 37%であった。65 歳未満では、男性は 19%、女性は 34%であり、昨年度と比較すると 65 歳未満の男性相談者の割合が増加しており、その他は減少した。

相談内容は、家族間の人間関係、認知症や精神疾患などをもつ家族との関わり方、配偶者の死をきっかけにした抑うつや不安、病気と共に生活していく中で困ったこと等であった。また、今年度は新型コロナウイルス感染症に関連した相談として、自粛生活により相談相手だった友人に会えないため話を聞いて欲しいという相談、高齢者の方で相談できる相手がいない、もしくはわからないため話を聞いて欲しいという相談があった。相談内容全体の半数以上は家族に関係する相談であり、その一部は、間接的に新型コロナウイルス感染症対策による生活様式の変化が影響して

いた。

表 4　年度毎相談件数（2014 年度以降）

年度	2014 年度	2015 年度	2016 年度	2017 年度	2018 年度	2019 年度	2020 年度
相談件数	107 件	98 件	84 件	80 件	53 件	59 件	59 件
うち新規	25 件	13 件	16 件	7 件	2 件	13 件	16 件

表 5　2020 年度相談件数(59 件)の内訳

相談申し込み			相談終結	相談人数
新規	再開	継続		（延べ）
16 件	6 件	37 件	1 件	59 件

※2020 年 3 月～5 月は新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、兵庫県看護協会より活動中止の通知があり中止となった。2020 年 6 月より再開し、6 月は電話相談、7 月より感染症対策を行った上、従来の方法で実施した。

○**評価**

今年度は新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、看護相談が 2 回中止となった。例年より開催数が少なかったにもかかわらず、全体の相談件数は昨年度と同じであった。さらに新規件数と継続件数は昨年より増加し、一方で再開件数は減少した。

新規相談では、各々の相談に沿った助言とともに、専門の相談機関を紹介することにより初回で終了になるケースがあった。継続相談は、相談者の抱える問題を一緒に整理したり、目標を一緒に考えて取り組み、馴染みの相談員と安心して自らの問題について話したり、考えたりすることのできる場となっており、そのような取り組みが継続件数の増加につながっていると考える。今年度は、新型コロナウイルス感染症の拡大による不安や外出の自粛と人との交流の減少に伴う生活の変化の影響により、開催数が少なかったにもかかわらず、昨年よりも新規の相談件数が増加し、全体の相談件数は昨年とかわらない結果になったと考える。

最後に、例年、本学の地域住民向けの研修会の参加者や地域ボランティアが相談に来られており、本学の地域貢献活動との相互効果があると考えられる。また、相談者の半数が高齢者であり、高齢者が気軽に立ち寄り相談できる場になっており、引きこもり予防や単身者の状況を把握することができる機会にもなっている。

○**教育上の効果**

「こころと身体の看護相談」では、精神看護専門看護師を目指す大学院生が、相談を担っている。来談者全員に対して、初回看護相談時、病院等で専門の臨床経験を積んだ精神看護学分野専攻の大学院生が相談を担当する可能性があることを口頭と書面で説明し、了解を得ている。大学院生が相談を担当する場合は、初回は教員

と 2 人で相談に入り、相談内容や相談者の状況に応じて 2 回目以降は教員のスーパーバイズのもと単独で対応している。今年度は、大学院生 1 名が、2 名の相談を担当した。精神看護専門看護師を目指す院生にとって、相談者とともに、問題を整理し目標を考えたり、必要な社会資源を紹介するなどの関りは、アセスメント能力や面接技術を向上させる上で効果的かつ実践的な学びの機会となっていると考える。

○課題

「こころと身体の看護相談」は、2007 年の開始以来身近な相談の場として機能しており、依然としてそのニーズは高いと考えられる。今年度の相談内容は、家族に関連した相談が多くを占めていた。継続相談は、従来通り、数年にわたるケースや、ご家族で入れ替わり来られるケースがあった。さらに、今年度の特徴として、新型コロナウイルス感染症拡大に関連した相談が数件あり、相談内容は多岐にわたっていた。今後も、地域住民の方々の多様なニーズに対応できるように専門知識や技術の向上を図るとともに、広い視野から、地域における看護相談の役割についても探求していくことが必要と考える。

①-4 もの忘れ看護相談

○概要

「もの忘れ看護相談」は 2012 年 3 月より開設し、もの忘れや認知症の人とその家族が地域で安心して暮らし続けられるよう、教員が個別相談を実施している。2013 年度からは知識の普及啓発のためのミニ講義、2014 年度からは参加者同士の交流を促す意見交換の場を設けた活動を継続している。また、ボランティアとして参加した学生に対する教育の場となるようにしている。

○活動日時および実績

2020 年度の「もの忘れ看護相談」は下記日程の 14 時～16 時に開催した（表 6-8）。ミニ講義を 30 分間実施し、その後に意見交換の場を 30 分程度設けた。希望者については、ミニ講義終了後、個別相談を実施した。なお、今年度の開催は、新型コロナウイルス感染症対策のもと実施し、ミニ講義と個別相談は、原則事前予約制（予約枠は、ミニ講義 15 名、個別相談 8 組と設定）として広報した。

表 6　『もの忘れ看護相談』開催日およびテーマ

開催日	テーマ
7 月 2 日（水）	認知症になっても自分らしく暮らすためのひと工夫
8 月 26 日（水）	もし認知症と診断されたら
10 月 8 日（木）	認知症と診断されても自分らしい生き方を決める
11 月 19 日（木）	認知症になっても進行を予防する 12 のこと

表 7 『もの忘れ看護相談』参加者数と運営人数（人）

開催日	参加者数			運営人数			
	65 歳以上	65 歳未満	計	教員	ボランティア		計
7 月 2 日（水）	4	1	5	4	―	あんしんすこやかセンター職員 2	6
8 月 26 日（水）	3	0	3	4	学部生 2	あんしんすこやかセンター職員 2	8
10 月 8 日（木）	3	1	4	4	学部生 2	あんしんすこやかセンター職員 2	8
11 月 19 日（木）	7	1	8	4	学部生 2	あんしんすこやかセンター職員 2	8

今年度のミニ講義は、4 回の開催を通して、認知症になっても自分らしく暮らすことができるための知識や情報を発信していくようにした（表 6）。参加者数は、新型コロナウイルス感染症流行の影響があり、例年よりも少なかった。また、これまで多くみられた将来に備えて認知症の情報を得たい方の参加は少なく、認知症に関しての心配や切迫した困りごとをもった 65 歳以上の方の参加がほとんどであった。講義では、もの忘れ看護相談担当者らで作成した「生活の中での困りごと別にみた自分らしく生活するためのひと工夫（2018）」のリーフレットを実際に活用するなどし、参加者がミニ講義で得た情報をより日常生活で活用しやすいように配慮した。講義の後は講義を担当した教員や地域包括支援センター職員も加わり、参加者同士で意見交換できる場を設けた。参加者は、教員や地域包括支援センターの職員への質問や、参加者同士で自身のもの忘れの体験やもの忘れ対策として取り組んでいる工夫などの情報交換を積極的にされていた。

表 8　個別相談者数（人）

開催日	新規相談	継続相談	計
7 月 2 日（水）	4	1	5
8 月 26 日（水）	1	1	2
10 月 8 日（木）	0	3	3
11 月 19 日（木）	3	0	3

表 9 主な個別相談内容と対応および助言内容

	主な相談内容	対応および助言内容
相談者自身に関すること	うまくいかないことが増えてきたので、いよいよ将来が心配。施設への入居を考えている。	将来に備えた自身の生き方についての整理（心づもりシートの活用など）、自分にあった施設選択に向けた情報提供等
	自分は認知症ではないと思うが、配偶者にもの忘れを指摘される。	相談者の話の傾聴、もの忘れに対する生活上の工夫、相談者自身の息抜きの必要性と方法
家族に関すること	認知症の診断を受けた配偶者のもの忘れの症状が日に日に進行している。生活上の工夫や対処方法を教えてほしい。	健康状態と生活状況の確認、記憶障害の症状への対応方法、相談者自身の息抜きの必要性と方法、認知症当事者とその家族の執筆した書籍の紹介等
	高齢の独居の家族のもの忘れ症状が気になる。認知症ではないと診断されたが、この先どうしたよいか悩んでいる。	家族と相談者の健康状態や生活状態の確認、認知症診断助成制度や介護保険制度に関する情報提供、近隣の医療機関の情報提供

個別相談では、新規ケースと継続ケースとも主な相談内容は、相談者自身や家族の記憶障害の進行に対する不安と先を見据えた生活への対応方法であった（表 9）。個別相談後も継続的に支援が必要と考えられるケースについては、次回の「もの忘れ看護相談」への参加や、同分野が担当している「神戸市看護大学もの忘れ看護電話相談」の利用を勧めた。また、相談者の同意が得られれば、もの忘れ看護相談に参加している近隣の地域包括支援センターの保健師に繋ぎ、相談者が地域で安心して暮らせるよう大学と地域包括支援センターが連携した支援活動を行った。

2020 年度の個別相談でみえた例年と比較し特徴的だった点は、認知症診断助成制度と介護保険制度の理解がしきれずそれぞれの利用方法がわからない、また神戸市の診断助成制度を利用した結果、認知症診断を受けたが今後どうしたらよいかと不安に思う家族がいたことであった。高齢者の健康・医療・福祉に関する制度が多くある中で、それぞれの制度の概要が理解しきれず、具体的な利用方法がわからないことで困惑されているようであった。また、診断助成度を実際に利用できても、診断された後の相談先がわからない、診断後の生活の見通しが立たないことに不安が増しているようであった。

○教育上の効果

「もの忘れ看護相談」では、認知症とともに生きる人への支援活動に関心をもった老年看護学分野の研究演習生が学生ボランティアとして参加した。活動に参加し、実際にもの忘れや認知症とともに生きる本人とその家族の日常生活やその思いを聴くことで、生活の困難さや認知症の症状の奥にある気持ちの理解に繋がっていた。

そして、認知症とともに生きる人とその家族への支援ニーズはなにか、看護職としてどのように応えるべきかを再考する機会となっていた。これらは、今後、もの忘れや認知症とともに生きる人々への看護を提供する上で、より実践的な経験となっていると考える。

○評価と今後の課題

今年度は、新型コロナウィルス感染症流行の影響で、医療機関で行われている健康教育や地域の集いなど、認知症やもの忘れに関する心配を気軽に話せる場が縮小される場合が多くあった。そのような社会の状況を踏まえ、IT や電話相談に不慣れな人々には、日々変化するもの忘れや認知症の症状に関する相談先が身近に必要であると考え、感染症対策のもと例年よりも開催規模を縮小して「もの忘れ看護相談」を実施した。その結果、参加者の多くがもの忘れや認知症についての切迫した不安や困りごとをもった高齢者であったことから、社会がどのような状況であっても認知症について相談できる場が地域に必要とされていることがわかった。アンケート結果からは、参加者のミニ講義に対する満足感は高く、ミニ講義は参加者にとって、正しい認知症の知識・情報を確認する、不安がある今の自分の状態を確認し安心感を得たり先の対策を考えられる場となっていることがうかがえた。また、2020 年度の個別相談の相談内容からは、今後も診断助成制度の正しい情報の拡散に加え、診断助成制度利用後の具体的な生活の見通しを立てられるような対応の必要があると考えられた。今後、診断助成制度の利用者の増加とともに診断助成制度利用後の生活についての相談の増加が予測される。このような相談者の不安の軽減に向けた具体的な対応をしていく必要がある。

一方、参加者自身は、認知症について勉強されてから参加される方がほとんどで、社会に溢れている認知症に関する情報を多くもっている。このことから、今後は、その方々の学習ニーズにも配慮したミニ講義の内容としながら、認知症に関する知識や情報を生活でうまく活用できるような対応をしていきたい。さらに、日進月歩で変化する認知症に関する施策や治療方法、地域で活用可能な社会資源など多くの情報がある中で、参加者にとって本当に必要な正しい情報を厳選し分かりやすく発信していくことが求められていると考える。

②コラボカフェ

○概要

本事業は、大学施設を活用した神戸市地域子育て支援拠点事業「ひろば型」として運営されている。現在、本学を含め神戸市内の 9 大学が本事業に参画している。本学は、2012 年にコラボカフェを開設した。名称である「コラボ」は、Collaboration の略であり、「大学の教職員と学生が地域住民および関連機関と共に」を意味し、「カフェ」は「子育て中の親子が一休みできる」場として機能することを目指して名づけられている。

○目的

コラボカフェは、大学施設を利用した学生と住民の参加を通して親と子が健康に育つための子育てを支援すること、および学生が生活を支援できる看護職として成長すること、また、それらにより大学の発展に寄与することを目的としている。

○実施事業

a)子育て親子への場の提供と交流の促進
b)子育て等に関する相談、援助等
c)地域の子育て関連情報の提供
d)子育て及び子育て支援に関する講習
e)コラボカフェを活用した授業及び研究の実施

○運営方法（表 10）

対象：生後 2 ヶ月から年度内に 3 歳になる子どもと、その保護者を対象としている。

開催日時：2020 年は、新型コロナウイルスの感染拡大防止のため、2 月 27 日からコラボカフェを閉鎖した。感染症拡大の影響によりコラボカフェが長期に渡って閉鎖して、子育て親子の行き場や交流の場がなくなっているため、自宅にいながら参加できる交流の場となるよう、ZOOM 機能を使用したオンラインコラボカフェを、7 月 21 日から開催するとともに、電話による相談の受け付けを開始した。10 月 6 日からは、感染予防対策を講じて、予約制とし、利用人数の制限を行って、来所型のコラボカフェを再開した。また、あらたに、コラボカフェ専用 LINE を 10 月 2 日より開設し、利用予約の受付、最新情報の配信を行い、問い合わせや相談など、気軽に連絡できるように整備した。

表 10　コラボカフェの運営方法と開催日時

運営方法	開催期間	頻度	時間	対象人数
コラボカフェ（従来）	1/9～2/26	火・木・金	10:00～12:00 13:00～15:30	制限なし
オンライン コラボカフェ	7/21～9/24	不定期 （計 11 回）	10:30～10:50	制限なし
電話相談	8/18～12/18	火・木・金	10:00～15:00	制限なし
コラボカフェ（感染対策）	10/6～12/18	火・木・金	10:00～12:00 13:00～15:00	予約制 （午前、午後） 各 3 組 (10/6-11/16) 各 7 組 (11/17-12/4) 各 5 組 (12/8-12/18) 各 3 組 (1/15～)

スタッフ：保育士 3 名が見守りを行い、保護者からの相談に応じている。7 月 21 日からのオンラインコラボカフェは､保育士 3 名と教職員 3~4 名で配信を行った。10 月 6 日からは、保育士 3 名が見守りを行った。

感染予防対策：完全予約制で人数制限を行った。利用に際し、スタッフ、保護者はマスクの着用を徹底し、入室時に手指消毒、検温、症状の確認を行い、37.5℃以上の方、症状のある方の利用はお断りすることとした。コラボカフェ内は、入り口、窓を開けて換気を行い、午前と午後の入れ替わり時には、おもちゃ、机や備品などの消毒を行った。万が一、感染が発生した際に、速やかに連絡が出来るよう、緊急連絡先を登録すると同時に、利用時に、兵庫県新型コロナ追跡調査システムへの登録をしていただいた。

○**実績**

利用状況

2020 年 1 月から 12 月末までのコラボカフェの開催日数は 63 日、年間の延べ利用者数は、保護者が 530 名、子どもが 558 名であった（表 11)。このうち新規登録者は 91 組であった。2020 年は、新型コロナウイルス感染症拡大の影響で、閉鎖と利用者の人数制限を行ったため、経年別にみると利用者数は激減している (図 1)。一日あたりの平均利用者数は 1 月から 2 月は保護者 18 名、子ども 18 名で、オンラインコラボカフェ開催時は、保護者 2 名、子ども 2 名、10 月から 12 月は保護者

4 名、子ども 5 名で、大幅に減少した(図 2、3)。電話相談の依頼はなかったが、コラボカフェの再開後は、来所時に母親から保育士に、子どもの発達についての質問があり、都度相談に応じている。

学生の参加状況をみると、延べ参加者数は 11 名であった。研究では、育児中の母親の防災対策に対する行動変容となる効果的な媒体についてアンケート調査を行い、子育て支援や、新生児乳幼児援助の授業では、乳幼児の発育発達の観察や、乳幼児を育児する親の思いを理解するために、コラボカフェ利用者に一人 30 分程度話を聞いて助産師の役割について学び、母子との交流を深めていた。

表 11　月別の延べ利用者数(人）(2020 年 1 月～2021 年 3 月)

	保護者	子ども	新規登録	学生	備考
2020 年 1 月	229	239	21	0	通常開催
2 月	174	178	10	0	通常開催
3 月	0	0	0	0	閉鎖中
4 月	0	0	0	0	
5 月	0	0	0	0	
6 月	0	0	0	0	
7 月	4	4	0	0	オンライン
8 月	8	8	0	0	コラボカフェ
9 月	10	9	0	0	開催
10 月	37	39	23	11	再開
11 月	43	50	22	0	
12 月	52	57	15	0	
2021 年 1 月	31	32	25	2	
2 月	39	40	27	0	
3 月	43	61	25	0	
2020 年度計	267	300	207	13	

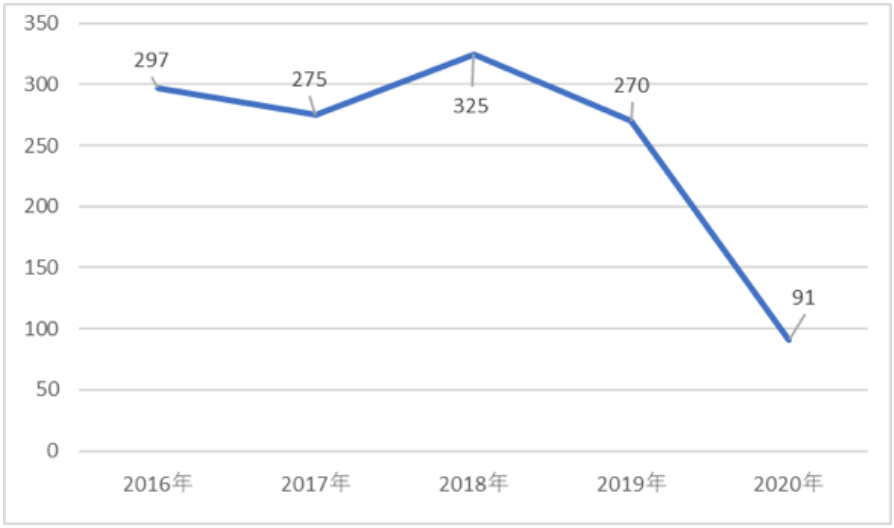


図 1　新規登録者数の推移(2016～2020 年)

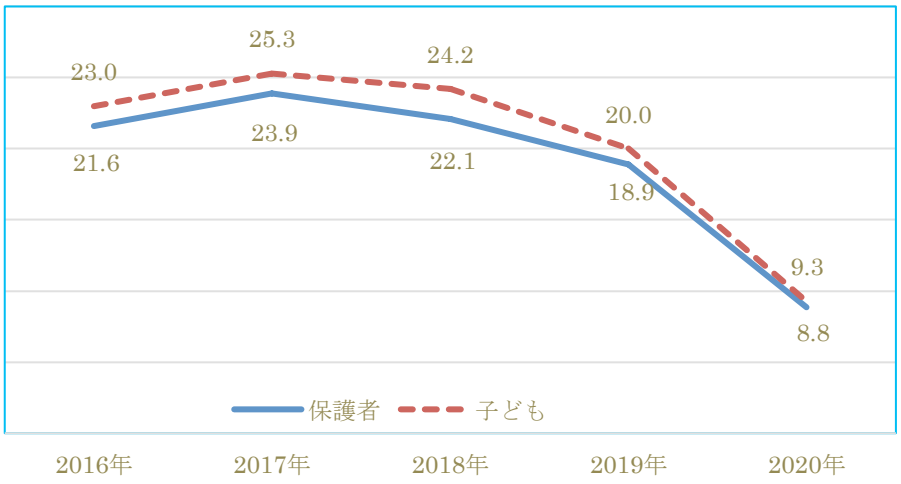


図 2　一日あたりの平均利用者数の推移(2016～2020 年)

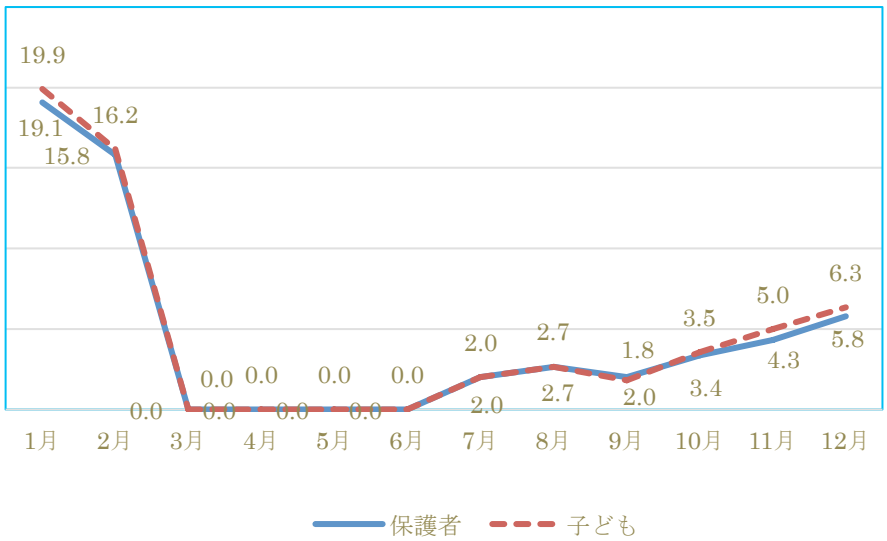


図 3　月別の一日平均利用者数（2020 年 1 月～12 月）

○開催プログラム

新型コロナウイルス感染症拡大の影響により、コラボカフェを閉鎖している期間の緊急事態宣言中、また宣言解除後に、子育てをしている親が「どのような生活をおくっていたか」、「どんなことで困ったか」「どんな場を求めるか」など、コラボカフェ再開に向けたアンケート調査を行った。そして、感染拡大防止のため、自宅からでも親子で参加できるオンラインコラボカフェを企画し開催した。オンラインコラボカフェの内容は、ふれあい遊び（手遊び、パネルシアター、歌、手作り工作）とし、親子が一緒に楽しめる遊びを配信した。来所型としては、感染予防対策を講じて、予約制で人数制限を行って、外部講師を招いて、「こどもの靴選び」を開催した。来所型のコラボカフェが再開されてからは、木曜日に親子でふれあい遊びとして、手遊び、絵本の読みきかせ、紙芝居、パネルシアター、楽器遊び、ダンスなどを保育士が実施した。また、12 月には、参加親子に、クリスマスリースと絵馬をプレゼントし、1 月には、節分、2 月にはひなまつりを開催した（表 12)。

表 12　2020 年度　開催プログラム一覧

日付	タイトル	参加数	担当及び外部講師
7 月 21 日（火）	オンラインコラボカフェ 布の遊び「リンゴコロコロ」他 手作りおもちゃ「マラカス」	3 組	教員 3 名、事務局 1 名、保育士 3 名
7 月 31 日（金）	オンラインコラボカフェ ふれあい遊び「キュウリができた」他 手作りおもちゃ「カエル」	1 組	教員 2 名、事務局 1 名、保育士 3 名
8 月 6 日（木）	オンラインコラボカフェ 手遊び「カレーライス」他 手作りおもちゃ「ひっぱり布」	3 組	教員 2 名、事務局 1 名、保育士 3 名
8 月 20 日（木）	オンラインコラボカフェ パネルシアター「かくれんぼ号」他 手作りおもちゃ「うさぎのパペット」	3 組	教員 3 名、事務局 1 名、保育士 3 名
8 月 27 日（木）	オンラインコラボカフェ パネルシアター「出して引っ込めて」他 手作りおもちゃ「ケロケロカスタネット」	2 組	教員 3 名、事務局 1 名、保育士 3 名
9 月 3 日（木）	オンラインコラボカフェ ふれあい遊び「ぞうきん」他 手作りおもちゃ「つつてっぽう」	1 組	教員 3 名、事務局 1 名、保育士 3 名
9 月 9 日（水）	こどもの靴選び	6 組	椎野先生、片倉、丸尾、半田、水川、事務局（丸山、大西、中島）保育士 4 名

9 月 10 日（木）	オンラインコラボカフェ パネルシアター「三匹の子ぶた」他 手作りおもちゃ「びっくりプー」	1 組	教員 3 名、事務局 1 名、 保育士 3 名
9 月 17 日（木）	オンラインコラボカフェ 布遊び・うたあそび「まん丸ちゃん」他 手作りおもちゃ「ひっぱり布」	0 組	教員 2 名、事務局 1 名、 保育士 3 名
9 月 24 日（木）	オンラインコラボカフェ パネルシアター「カレーライス号」他 手作りおもちゃ「牛乳パックのボール」	1 組	教員 2 名、事務局 1 名、 保育士 3 名
10 月 8 日（木）	オンラインコラボカフェ 布遊び、うたあそび「まんまるちゃん」 他　手作りおもちゃ「ひっぱり布」	3 組	教員 2 名、事務局 1 名、 保育士 3 名
10 月 22 日（木）	オンラインコラボカフェ パネルシアター「かくれんぼ号」他 手作りおもちゃ「うさぎのパペット」	2 組	教員 1 名、事務局 1 名、 保育士 3 名
12 月 10（木）・ 17 日（木）	クリスマス会 手品「伸びるツリー」ほか　工作「マラカス作り」マラカスで合奏「赤鼻のトナカイ」他	14 組	保育士 3 名
12 月	お土産（手作りクリスマスリース）		保育士 3 名
1 月 26 日~29 日	節分週間　鬼の的あて常設		保育士 3 名
2 月 18 日（木）・ 3 月 4 日（木）	ひなまつり 工作「おひなさま」 おひなさまと記念撮影　など		保育士 3 名

○教員と保育士が企画・運営したプログラム

・アンケート調査

7 月に、コラボカフェ再開に向けたアンケート調査を行った。2019 年度のコラボカフェ利用者 141 名にアンケート協力依頼の手紙を郵送し、大学に設置のアンケート回収 BOX に提出する、または QR コードからアンケートフォームに入力する回答方法を選択してもらった。26 件の回答が得られ、回収率は 18.4%であった。

本学での来所型コラボカフェが再開された場合に「利用したい」と 16 名が回答し、「利用したいが感染のことが心配」と 10 名が回答した。緊急事態宣言の発令中の生活について（複数回答可）、18 名が「外出できず、子どもと自分だけで、子どもとの遊び方や過ごし方がわからなかった」、8 名が「ちょっとした相談ができるところがなかった」、7 名が「イライラしたり、怒りっぽくなった」、と回答した。緊急事態宣言が解除された 7 月現在の生活について、23 名が「子どもと出かけられるところが少ない」、12 名が「感染防止のため、以前と同じようには外出していない」、8 名が「感染予防をして、以前と同じくらい外出している」、2 名が「ストレスがた

まる一方で、解消法がない」と回答した。オンラインコラボカフェに期待することについては、「手遊び動画の配信」が 18 名、「読み聞かせの配信」が 13 名、「自宅でできる子どもの遊びや運動」が 12 名、「子どもとの適切なかかわり方」が 6 名、「オンライン個別相談」が 1 名、「オンラインは結局家なので、あまり使用しないと思う」が 2 名であった。そのほかのコラボカフェへの要望としては、「1 歳児が身体を動かして遊べる場所を探している。家の中だけでは限界があるので、遊び場があるといなと思う」、「子どもと一緒に、外に出かける、家と違う場所にいるとうことで子どもも楽しく、お母さんの気も晴れたりするのではと思う。オンラインだとお母さんの気持ちは変わるのかな？と考えます。予約制や少人数制にして早くコラボカフェが再開できることを願っています」「雑談レベルの相談を気軽にしたい」「子どもがとても楽しみにしている」等の意見があった。

・「オンラインコラボカフェ」

新型コロナウイルス感染症拡大の影響により、自宅から親子で参加できるように、オンラインコラボカフェを開催した。オンラインコラボカフェの内容は、保育士が企画し、ふれあい遊び（手遊び、パネルシアター、歌、手作り工作）とし、親子が一緒に楽しめる遊びを配信した。手作り工作では、保育士が準備した工作キットを大学の玄関に置いて、希望者は大学に取りに来てもらい、オンライン配信当日は、親が、動画をみながら、手作りのおもちゃを作成して、子供と遊べるように工夫した。

オンライン保育の配信にあたっては、教職員と保育士が協力して、動画の撮影、編集作業を行った。当日のライブ配信では、保育士が出演し、教職員が ZOOM 配信の補助の役割を担った。参加親子は、配信映像をみながら、一緒に手遊びをしたり、手をたたいて喜んでいる姿がみられた。手作り工作キットを、毎回楽しみに取りに来て、画面をみながら、母親が作成し、子どもと一緒に遊んでいる様子もうかがえた。

・「こどもの靴選び」について

感染予防対策を講じて、完全予約制とし、一度に会場に入室する人数を制限して行った。参加者は 6 組 13 名であった。初めに椎野啓三講師（足と靴のプラウド：代表取締役・店長）より、こどもの足の発育と靴選びについて骨格モデルや靴を用いての説明があった。「靴の選び方」の講義後、全員の子どもの足の長さや幅を計測して、実際に履いている子ども靴をみながら、買い替え時期や選び方についてアドバイスを行った。参加者より、「待ち時間がなく、一人ずつ、ゆっくり講師に質問をすることができた」と、好評を得られた。「自分の選んだ靴が、こどもの足にあっていなかったことがわかりました」「こどもの足が細いタイプだと知ることができて、具体的な靴選びの方法がわかりました」という感想がきかれた。

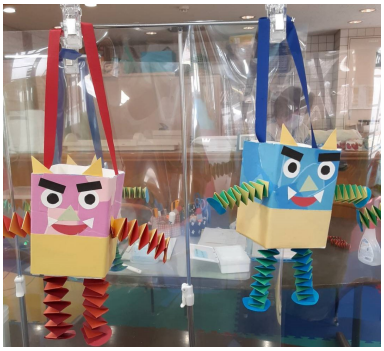
○保育士が企画・運営したプログラムについて

・クリスマス

12 月 10 日と 17 日に、プチクリスマス会を行い、それぞれ、5 組と 4 組が参加した。手品、紙芝居、手遊びに続き、マラカスを一緒に制作し、「赤鼻のトナカイ」に合わせてマラカスで合奏した。その後、子どもがクリスマスツリーまで走って星を貼り付ける「お星さまぺったん」の遊びをすると、子どもたちは、たいへん喜んで、何度も貼りたいと繰り返し貼り付けた。最後は体操をして、クリスマスリースのプレゼントを渡すなど、盛だくさんなプログラムであった。事前に、会の告知をしていたので、予約が殺到したが、感染予防で人数制限があるため、お断りをしなくてはならなかった。親子ともども、楽しみに参加され、満足度が高い内容であった。

・節分

2 月 2 日に、ふれあい遊びを兼ねて、節分の催しを実施した。参加者は 3 組であった。節分の由来のお話しを行うと、母親は関心高く聞き入っていた。歌、読み聞かせに続き、段ボールでつくった鬼に見立てたバイキンマンの顔に、新聞紙を投げて「福は内、鬼は外」と、(鬼)退治を行った。新聞紙が命中すると、バイキンマンが裏側となり、アンパンマン（福）が表側に現れる仕掛けとなっており、子どもたちは、歓声をあげて喜んでいた。参加者には、三方（豆入れ）をプレゼントした。



・ひなまつり

2 月 26 日と 3 月 2 日に実施し、参加者は、それぞれ 6 組と 4 組であった。オープニングで「お花が笑った」の歌に合わせて、飛び出し箱から花が飛び出す演出を行い、歌、パネルシアターに続いて、お雛様の顔はめパネルで記念撮影をし、お雛様の着物の飾りつけで花を貼ってもらう「ぺったんゲーム」を行った。4 か月など月齢の低い子どもも参加していたが、楽しそうに積極的に参加している母親に抱かれ、催しをじっと見て笑って過ごしていた。また、夫婦一緒に参加した親子もみられた。

○評価

今年度は、新型コロナウイルス感染症拡大の影響により、来所型のコラボカフェは 10 月まで閉鎖の対応とした。その間に、利用者のアンケート調査を行い、自粛

期間中の実態やニーズの把握を行い、閉鎖期間中に行えることとして、オンラインでのコラボカフェの開催を行った。オンラインコラボカフェは、リピーターの参加者が多く、新規の参加者は伸び悩んだ。その理由としては、アンケート調査の意見でも述べられていたが、外に出かける、家と違う場所で、気分転換をしたかったことが考えられた。来所型コラボカフェの再開を待ち望む利用者に応えて、感染予防策を講じ、来所型コラボカフェを再開してからは、利用人数の制限があり、利用人数は例年より少ないが、予約開始とともに、連絡がはいるなど、楽しみに参加されている。閉鎖中より、電話相談も開始したが、電話がなかったのは、雑談レベルで気軽に相談したいという利用者の意見を反映しており、コラボカフェを再開してからは、来所したときに、子どもの発達に遅れはないかなど、保育士との会話の中で相談が多くみられた。子どもの遊ぶ場であると同時に、保育士にちょっとした相談をしたり、母親同士がおしゃべりをすることで、自粛生活のストレス解消となっていることがうかがわれた。

新型ウイルス感染症の拡大に伴って、運営方法が状況に応じて変更した 1 年であった。オンライン保育の試みのほかに、直通電話や SNS（LINE）を活用して、イベント情報や、再開のお知らせなどの情報をタイムリーに発信すること、予約を取りやすくすること、保育相談を受け付けることを新たに開始して、SNS で情報を収集したり、交換したりする世代のニーズに応える方法を取り入れた。これにより、人数制限や予約制に変更したにもかかわらず、受付がスムーズになり、混乱を生じることなく運営することができた。

○今後の課題

来年度も、新型コロナウイルスの感染の影響が予想される。コロナ禍にあっても、安全に安心して利用できる、子育ての場の提供と同時に、新しい生活様式に沿った支援方法の検討を継続して行うことが課題である。コラボカフェの活用を提案するなど、大学としての取り組みを明確にすることが必要である。また、コロナ禍にあって、学生は、臨地や地域での実習の機会が制限され、地域住民と直接触れ合える機会が減っている。このような状況にあっても、コラボカフェの活用を推進は、コロナ禍で抱えている親子の悩みに寄り添い、看護職として行える支援を考えることができる機会となるため、次年度の課題として取り組んでいく。

そして、本事業の目的の一つに、「学生がコラボカフェに参加することを通して、地域住民の健康な生活を支援する看護職として成長する」ことがあげられている。コロナ禍にあって、長期間コラボカフェを閉鎖していたが、再開後より、大学院生が授業や研究でコラボカフェを活用しており、親子の健康な生活を支援する学びを得ている。また、学生(学部生)より、「授業の合間に気軽にコラボカフェを訪れたい」と申し出があり、利用者と関わりをもつことで、地域の親子の生活に触れ、看護職として健康生活を支援することについて、考える機会とできている。コロナ禍であ

っても、事業目的も達成できるように、感染対策を講じた運営体制の整備を行っていく。

③プレパパ・プレママセミナー

○概要

大学院助産学実践コースの助産診断技術学Ⅰの授業の一環で、セミナーの企画から運営まで大学単独で実施している。セミナーの目的は、神戸市の地域住民（妊婦とそのパートナー）に妊娠期から子育て期を見越したセルフケア獲得への意識を高められるような、集団指導技術の実践的技術を助産学実践コースの学生が習得することである。

○実績

今年度はコロナ禍の影響により、対面とオンライン配信のハイブリット方式での開催となった。第1回目を2020年9月5日に、テーマを「赤ちゃんと一緒、私のお産」として、大学院2年生が中心となり開催した。各日4回ずつ計8回のセミナーを、神戸市在住の妊婦とそのパートナーの計 32 組に行った。対面での内容は体験を中心に、沐浴体験、妊婦体験、個別相談などであった。オンライン配信での内容は、妊娠期の身体の変化と過ごし方、分娩期の流れや過ごし方などの知識の提供を行った。対面での沐浴体験では、沐浴の手順を覚えるのではなく、参加者が沐浴をすることが楽しみに感じられるような温かい雰囲気で、1組につき1名の学生が担当し、質問に答えながら行った。オンライン配信での分娩期の流れの話しでは、分娩の始まりから進み方の説明を行い、お産のイメージを促した。また安楽な分娩期の過ごし方や産痛緩和のためのマッサージ、温罨法などを紹介した。

参加者からは、「コロナ禍により産院でのセミナーが中止となる中、開催が本当に有難かった」「1組に1名の学生の対応で質問がしやすく、得られるものが多かった」「お産がイメージできた。分かりやすかった」等の意見をいただき、セミナー参加の満足度は高かった。学生は、参加者1組につき1名の学生が担当したことで細やかな対応をすることができたと感じていたが、より分かりやすく伝える方法を強化すべきであると感じていた。コロナ禍により初のオンライン配信となり、オンライン配信分のアンケートの回収率が低く、回収率の改善を課題としていた。

○教育上の効果

学生はそれぞれが役割分担をしながらセミナーを企画から準備、運営、評価までの一連を学び、グループダイナミクスを用いて集団指導技術を向上させることができた。本セミナーは、9月が2年生、2月は1年生が主体となって実施している。1年生、2年生ともお互いのセミナーの事前練習に参加することで、意見を出し合い、内容をブラッシュアップすることができ、よい相互効果が見られた。セミナー全体を通して、目的や目標に一貫性ある内容とすることや、対象者のセルフケア能力の

向上につなげるために、限られた時間の中で、焦点を絞って内容を組み立てること、分かりやすい伝え方など、助産師が行う健康教育について実践を通した学びにつながった。

○今後の課題

体験型を取り入れたプログラムを継続しつつ、オンライン配信の内容についても、すべての参加者の目標が達成できるように、その内容、方法、プログラム全体の構成まで再考する必要がある。

④竹の台ふれあいまつり

○概要

竹の台ふれあいまつりは、「竹の台地域委員会」が主催で実施されており、平成18 年から本学のブースも設けて、大学院助産学実践コースの学生が中心となりボランティアとして参加している。

○実績

2020 年度においても神市看護大学大学院看護学研究科博士前期課程ウィメンズヘルス看護・助産学専攻の院生とウィメンズヘルス看護学分野の教員がボランティアとして参加する予定としていた。しかし、新型コロナウィルス感染症の蔓延に伴い、竹の台地域委員会よりふれあいまつりが中止となったため、参加しなかった。

⑤命の出前講座

○概要

命の出前講座は、助産学専攻科の授業として始まった取り組みである。思春期にある地域住民に対して健康教育を実施する健康支援活動として始まっており、現在は大学院助産学実践コースの大学院生が主に引き継いでいる。

○実績

対象校は小寺小学校 4 年生 66 名、5 年生 73 名であった。第 1 回目は令和 2 年 10 月 22 日（木）、5 年生に対し実施した。参加者は、大学院 1・2 年生、計 11 名で主に教員が企画の要点を作成し、講義は教員が、劇については学生が主体で行った。第 2 回目は 11 月 5 日（木）、4 年生に対して授業を行った。参加者は大学院 2 年生、計 3 名であり、健康教育の企画・運営については、大学院生が全てを実践した。

○内容

授業の目標としては、二次性徴をこれから経験する、またはしている自分や他者の体や心の変化を理解し、互いの違いについて知ることである。また、本授業を通して、命の大切さを考える機会につなげることである。5 年生では第二次性徴に関するクイズを取り入れた参加型の授業を行い、中盤では院生による出産の劇を行な

った。最後は、自宅出産について紹介している写真絵本（「うちにあかちゃんがうまれるの」）を教員が朗読して終了している。院生による出産の劇は出生・命について考えるきっかけとなり、写真絵本の朗読では、どのように産まれてきても 1 人ひとりが大切な存在であることを助産師として伝えた。

4 年生の月経教育では、男女の体の違いについて学びを深め、月経時の手当てについて実際に生理用品を用いた演習を行った。4 年生は、初めて聞く言葉には質問をし、実際にナプキンを使用した演習には積極的に参加していた。授業後の感想では、思春期に起こる「体の変化や違いを知れて良かった」「成長には差があることがわかった」「生理が怖いと思っていたけど知ることで安心した」など体の変化を知り、変化を受け入れる準備につながっていた。

今年度は、新型コロナ感染拡大防止を十分に配慮し、実施時は全員マスク着用を厳守、密閉を避けるため窓は解放、教室内では密を避け一定間隔を保ち演習を行う工夫をした。

○成果

昨年、この授業に参加した大学院生は、４年生から５年生への成長と変化を知る機会となった。今年度、初めて参加した大学院生は、次年度の授業を受講する意欲を示しており思春期教育の重要性を感じている。実際に４年生の授業を企画・運営をした大学院生は、助産師が行う思春期教育について考えることができ、助産師活動の幅広さを学ぶことができていた。

生理用品を実際に用いた演習は、女子児童にとっては具体的な方法を知ることが月経に対する安心につながっていた。男子児童にとっても貴重な経験となり、男女による第二次性徴の違いを学ぶ機会となった。

⑥西区ヘルスアップ作戦

○概要

西区ヘルスアップ作戦は、健康寿命の延伸と QOL の向上を目的とした西区内の各地区の住民の方々が主体となった健康増進活動である。各地区の地域住民の皆様がヘルスアップ推進員となり、地域の健康づくりリーダーとして活動されている。ヘルスアップ推進員はヘルスアップ作戦会議を開催し、各地区の健康増進に関する活動計画立案とその運営をおこなっている。これらの活動は、2005 年から神出地区、2006 年から学園都市地区、2007 年から櫨谷地区と平野地区、2008 年から押部谷地区、2009 年から玉津地区、2010 年から伊川谷地区の 7 地区において、神戸市西区保健福祉部と本学が共に協働して実施してきた。なお、神戸市西区保健福祉部と本学によるヘルスアップ作戦は 3 年計画として実施され、3 年が経過した後には、ヘルスアップ推進員の方々が主体的に各地区の状況にあわせて活動を継続されている。

⑦トライやる・ウィーク

○概要

トライやる・ウィークは、兵庫県下の中学校２年生が地域を学びの場に、体験を通して、自ら学び、考え、体験する教育の一環として実施されている。生徒一人一人の興味・関心に応じて「職業体験」「農林水産体験」「文化芸術創作体験」「ボランティア・福祉体験」などの社会体験活動を５日間各事業所にて行われる。それによって、学校ではできない様々な活動に挑戦し、豊かな感性や創造性を高めたり、自分なりの生き方を見つけたりすることができるよう支援し、ともに生きることや感謝の心を育み、自立性を高めるなど「生きる力」を育成することが目的とされる。

○実績

2020 年度おいては、3 日間 3 名を受け入れる予定としていたが、神戸市教育委員会からの通達により、新型コロナウィルス感染症の蔓延により、従来の活動内容では実施されないこととなり、本学での受け入れは行われなかった。

⑧こうべ生涯学習カレッジ（コミスタ神戸）

○概要

神戸市内にある 12 大学による大学連携セミナーとして、各校の教員の様々な専門分野を活かした講義を「こうべ生涯学習カレッジ」として提供しており、本学も 2012 年度から参加している。

○実績

2020 年度は、基礎看護学領域が担当する予定であったが、「こうべ生涯学習カレッジ」が新型コロナウイルス感染症の影響のため中止となった。

⑨ユニティ講座

○概要

神戸研究学園都市大学交流促進協議会（UNITY）の公開講座は、市民の生涯教育を振興するとともに、加盟校の最新の研究成果を市民に還元することを目的として、1999 年度から開催しており、各加盟校がそれぞれの研究分野のテーマに即して、原則として毎年 1 講座（5 回シリーズ）の企画・実施をしている。

○実績

2020 年度は、人間科学領域が担当する予定であったが、「ユニティ公開講座」が新型コロナウイルス感染症の影響のため中止となった。

⑩看護専門職講座

○テーマ

「With コロナ時代における ICT を活用した訪問看護ステーションの感染予防対策」

（兵庫県訪問看護ステーション連絡協議会・神戸市看護大学共催）
講師：本学地域連携教育・研究センター　センター長　片倉直子
　　兵庫県訪問看護ステーション連絡協議会訪問看護部会　並河直子
　　岩﨑美智子

○**実績**

日時：2020 年 8 月 22 日（土）
方法：ZOOM によるライブ配信（本学本部研究棟 4 階小会議室から配信）
　　およびオンデマンド配信
対象：訪問看護ステーション（病院診療所なども含む）等の管理者、感染症マニュアル作成担当または作成に関心のある方、行政、大学関係者など
内容：①兵庫県訪問看護ステーション連絡協議会調査結果報告
　　②調査報告からいえること：訪問看護師がこころの健康を維持するために
　　（①②;本学片倉センター長）
　　③訪問看護における新型コロナウィルス感染症予防対策:職場環境と利用者・家族を守るために知っておくべきこと
　　（兵庫県訪問看護ステーション連絡協議会訪問看護部会　並河氏・岩﨑氏）
　　④質疑応答
申込数：ライブ配信 38 人、オンデマンド配信 159 人
参加数：ライブ配信 32 人、オンデマンド配信 194 人のアクセスあり
概要：まず、片倉センター長より、2020 年 5 月に兵庫県訪問看護ステーション連絡協議会の会員である訪問看護ステーションを対象に実施した「COVID-19 感染症に関する訪問看護ステーション調査」の結果が報告された。また、コロナ禍で勤務することのストレスに対して、訪問看護師、ステーション管理者、法人が、それぞれの立場で行える「こころの健康を維持する」ための方策について講演した。次に、兵庫県訪問看護ステーション連絡協議会訪問看護部会の岩﨑氏、並河氏より、コロナ禍における新型コロナウイルス感染症の感染予防対応方法として、感染予防策や訪問看護ステーションの事業継続計画に必要な要素などについて講演した。その後の質疑応答では、参加者から講演内容についての質問がされ、内容を深めることができた。さらに最後には、兵庫県訪問看護ステーション連絡協議会会長の山﨑氏より、兵庫県訪問看護ステーション連絡協議会が大学と連携することで、ICT を用いた研修を初めて開催することができ、コロナ禍およびポストコロナでも ICT を活用した情報共有や地域連携が推進される一歩となったと講評いただいた。
研修後のアンケート結果：アンケートは QR コードを用いて行った。回答は 58 件で、内訳はオンラインでの参加が 16 件（27.6%）、オンデマンド配信での参加が 38 件（65.5%）、オンライン・オンデマンドの両方の参加が 4 件（6.9%）であった。また、所属は、訪問看護ステーション勤務が 54 件（93.1%）と最も多かった。

以下、アンケート結果を表 13-16 に示す。

表 13　研修内容について　N=58

	件（%）			
	とても よかった	まあまあ よかった	あまり よくなかった	参加して いない
①兵庫県訪問看護ステーション連絡協議会 調査結果報告	28 (48.3)	29 (50.0)	0 (0.0)	1 (1.7)
②調査報告からいえること：訪問看護師が こころの健康を維持するために	29 (50.0)	27 (46.6)	1 (1.7)	1 (1.7)
③訪問看護における新型コロナウィルス 感染症予防対策：職場環境と利用者・ 家族を守るために知っておくべきこと	40 (69.0)	17 (29.3)	1 (1.7)	0 (0.0)
④質疑応答	13 (22.4)	30 (51.7)	10 (17.2)	5 (8.6)

※「全くよくなかった」はすべての項目で 0 件であった

※ N は回答なしを含む

表 14 今回の研修内容が貴施設で活用できるかについて　N=58

	件（%）		
	おおいに 活用できる	まあまあ 活用できる	あまり 活用できない
①感染症対策	27 (46.6)	21 (36.2)	6 (10.3)
②利用者・家族対応	26 (44.8)	23 (39.7)	5 (8.6)
③スタッフ対応	27 (46.6)	25 (43.1)	2 (3.4)
④多職種連携	15 (25.9)	35 (60.3)	4 (6.9)

※「全く活用できない」はすべての項目で 0 件であった

※　N は回答なしを含む

表 15　ICT を今後の実践でどのように取り入れるかについて　N=58

	件（%）			
	ぜひ 取り入れたい	ある程度 取り入れたい	あまり取り 入れたくない	全く取り 入れたくない ／わからない
①オンライン研修の実施	20 （34.5）	26 （44.8）	2 （3.4）	4 （6.9）
②オンライン研修への参加	30 （51.7）	22 （37.9）	1 （1.7）	0 （0.0）
③オンラインでの会議	26 （44.8）	24 （41.4）	2 （3.4）	0 （0.0）
④オンラインでの利用者・家族対応	9 （15.5）	21 （36.2）	12 （20.9）	9 （15.5）

※ N は回答なしを含む

研修内容については、すべての講演内容で「とてもよかった・まあまあよかった」が 90%以上であった（表 13）。また、研修内容の活用については、すべての項目が「おおいに活用できる・まあまあ活用できる」が 80%以上であった（表 14）。さらに、ICT を今後の実践でどのように取り入れるかについては、オンライン研修への参加で「ぜひ取り入れたい」が半数を超えており、ニーズが高いと考えられた（表 15）。

本研修への意見・感想・要望等については、主に【研修の感想】と【今後の要望】について記述があった。【研修の感想】では、感染症の知識向上に役立った、今後は ICT の活用が不可欠だが、ICT に慣れていないといった意見がみられた。【今後の要望】では、オンライン研修の継続や、訪問看護を想定した研修の継続、大学や兵庫県訪問看護ステーション連絡協議会の役割に期待する意見もみられた（表 16）。

今後も、地域医療のニーズを汲み取りながら、関係機関と協働してニーズにあった専門職講座を開催し、地域貢献をしていく必要があると考えられた。

表 16　本研修への意見・感想、要望等について（自由記載）

概要	記述内容（一部改変）
【研修の感想】	
○感染症の知識の向上に役立った	・スタッフ間でコロナに関する知識の差があったが、ある程度同じレベルまで持って来ることに役立った
○ICT に慣れていない	・受講する側もリモートに慣れていかないといけないと感じた ・感染予防のためにも ICT の活用は不可欠だが、ICT の活用が浸透しておらずかえって時間がかかるという状況がある ・初めての web 研修だったからか、質疑応答が少なかったのは少し残念であった。慣れていないことも原因だと感じた。
【今後の要望】	
○オンライン研修を継続してほしい	・オンデマンド配信がよかった
○訪問看護場面を想定した研修を継続してほしい	・訪問看護の場面を想定した情報が少ないので、今後このような研修があれば是非参加したい ・このような研修を増やしてほしい ・訪問看護の実際の現場に役立つ研修をお願いしたい
○大学や県協議会の役割に期待したい	・コロナ禍のような広範囲にわたる影響のある事象についてのリアルタイムで大規模調査は、大学でなければできないためそのような役割を担ってほしい ・メールでのやりとりやｗｅｂ会議などを普及させていくために、県協議会や大学の力を貸してほしい

※ その他のアンケート調査結果は、本報告書別添資料参照（p54)

⑪出前健康講座

○概要

本学では、市民や地域団体などの学習意欲にこたえるため、依頼のある際に教員が地域に出向き講演する出前健康講座を行っている。この出前講座は本学地域連携

教育・研究センターを窓口として依頼があったものを対象としており、主催者や地域からの要望を伺いながら、できるだけニーズにこたえられる教員を派遣するよう努めている。2020 年度は、出前講座 1 件の依頼があり開催を検討したが、新型コロナウイルス感染症の影響で依頼地域から中止の意向があり実施はなかった。今後も継続して地域に出向いて地域貢献活動を行っていく方針であり、より充実した健康知識や情報を住民の方々に提供していけるよう努めていきたい。

⑫HAT 神戸復興住宅における出前講座

○概要

本講座は平成 15 年よりボランティア活動を展開しているＨＡＴ神戸復興住宅において、連合自治会より高齢化が急速に加速している地域高齢者の介護予防にむけ健康講座を開催してほしいとの要請をうけ実施した出前講座である。

○実績

本講座は、今年度は COVID-19 感染予防観点から実施していない。

⑬フレイルチェック事業

○概要

本事業は、神戸市（医療介護推進財団に委託）が、フレイルサポーターを育成し、フレイルサポーターが地域の中でフレイルのリスクがある高齢者を把握し、早期に予防活動を支援することにより、将来的に要介護状態に陥ることを予防するものである。本学は、保健師課程 4 年生が「①地域住民の介護予防事業において、保健師による介護予防の事業・施策の立案、実施における関係機関との連携や調整、評価の役割を学ぶ」、「②フレイル事業に参加・協働し、住民の主体的介護予防実施について学び、住民の主体的活動の推進のために保健師がどのような役割を担うかを考える」、「③フレイル事業に参加した地域住民に対して、介護予防に関する相談を実施できる」、の 3 点を目的に参加している。学生は、事前準備として、11 月 13 日に神戸市介護保険課の保健師より、「神戸市における介護予防事業施策と保健師の役割」について講義を受け、神戸市の高齢者・介護予防の現状と課題、フレイルへの予防対策、住民組織活動の意義、保健師の役割について学習し、当日に向けて準備を行った。

○実績

2020 年 11 月 20 日に、神戸市介護保険課、神戸市医療介護推進財団、神戸市フレイルサポーター、本学保健師課程 4 年生が、本学の近隣する居住する住民 7 名を対象に開催した。新型コロナウイルス感染症の流行もあり、参加者を少人数にするとともに、検温・消毒・十分なスペースの確保等、感染予防に十分留意した体制で実施した。内容としては、神戸市医療介護推進財団、神戸市フレイルサポーターの

方が、フレイル予防導入の講話、自己簡易チェック（サルコペニアの簡易指標である指輪っかテスト、栄養・口腔・運動・社会性・こころのチェック)、深堀りチェック（口腔・運動・社会参加のフレイルチェック)、計測後の講話であった。本学学生も誘導、受付、計測（血圧、握力、身長、ふくらはぎ周囲長、開眼片足立ち、筋力量)、保健指導を一緒に実施した。実施にあたり、各ブースで学生より神戸市フレイルサポーターの方に声をかけ、実施方法やポイントを教えていただきながら、参加者の方への声かけ・計測・結果説明をした。実施後には、参加者から、本事業への参加を通して、自身の健康を見直したり、健康を増進するような内容になっていることや、本学か本学以外のいずれかで継続してほしいとの声が多数あった。

○教育上の効果

学生は、参加者にフレイルチェックの結果と相談内容を伺い、介護予防に関するセルフケア能力の向上ができるように、パンフレットを用いながら一緒に考えることができた。また、神戸市医療介護推進財団との連携や、神戸市フレイルサポーターという住民組織の力を信じ、事業立案・実施・評価のすべてのプロセスにおいて、住民組織に決定権のある活動できるような支援をすることでグループの力・自主性を向上させることを学んだ。さらに、神戸市フレイルサポーターが、活き活きと自主的に活動されていることを感じ、グループの持つ力を知ることで、本事業が地域住民の地域の健康づくりの担い手として活躍する場でもあり、活動を通して社会参加することで、自らの健康寿命を伸ばすことにもつなげていることを学んだ。

○今後の課題

今年度は新型コロナウイルス感染症の発生状況を踏まえた感染予防対策を検討して行ったが、次年度においても、感染症の発生状況に応じた対策を十分に検討し、その上で実施していく必要がある。

⑭もの忘れ看護電話相談

○概要

新型コロナウィルス感染症の流行や緊急事態宣言発令に伴う外出自粛や認知症対策事業の停止により、認知症患者やその家族がサービスから取り残され、家庭内に閉じこもることとなっている現状をふまえ、2020 年度に新たに老年看護学分野で取り組みを開始した活動である。「もの忘れ看護電話相談」を行うことで、認知症患者およびその家族が社会から孤立することなく、安心して自宅での生活を継続できることを目指している。

○活動日時および実績

2020 年度の「もの忘れ看護電話相談」は 9 月より月 1～2 回の頻度で相談日を設定し、下記日程の 14 時～16 時に開催した（表 17)。事前予約制（予約枠は 1 日 3 名、1 人 30 分）で広報した。

表 17　相談者数（人）（複数相談者を含む）

開催日	新規相談	継続相談	計
9 月 10 日（木）	1	0	1
10 月 8 日（木）	1	0	1
12 月 16 日（水）	1	0	1
1 月 21 日（木）	0	1	1
3 月 10 日（水）	3	1	4

※ 継続相談はもの忘れ看護相談からの継続相談者

表 18 主な相談内容と対応および助言内容

	主な相談内容	対応および助言内容
相談者自身に関すること	今後、もの忘れが進んでいくことについて不安がある。今後の生活がどのように変化していくのかわからない。	検診や受診の具体的方法の提示、地域の社会的資源の紹介、日常生活の工夫等
家族に関すること	家族（配偶者や親、兄弟）のもの忘れの症状が進行し、毎日の生活が大変になってきた。生活上の工夫を教えてほしい。	記憶障害の症状への対応方法、相談者自身の息抜きの必要性と方法、記憶の強化方法等

主な相談内容は、家族のもの忘れの症状進行に対する不安とその生活の変化、もの忘れの症状やそれに伴う生活の変化に伴う困りごとであった（表 18)。相談後も継続的に支援が必要と考えられるケースについては、対面で実施しているもの忘れ看護相談への参加や次回のもの忘れ看護電話相談の予約を勧めたり、受診や地域包括支援センターへの相談を勧めるなど、相談者が継続して地域で安心して暮らせるように支援を行った。対面で実施しているもの忘れ看護相談と同様に、地域で生活する人にとって、地域の相談窓口を知ることや看護教員から情報提供を受けることは、困ったときの相談先が身近にあることを感じられる機会や他で訴えることのできない自己の思いや悩みを打ち明ける場となっていた。また新型コロナウィルス感染症の流行による緊急事態宣言の発令や活動自粛が、地域で生活している認知症高齢者や家族の人の生活を変化させ、認知機能に影響を与えている様子や認知症高齢者や家族が戸惑いながら生活されている様子が窺えた。

○評価と今後の課題

「もの忘れ看護電話相談」は、今年度、新型コロナウィルス感染症の拡大に伴い、相談のために外出できない高齢者や家族のために新たに開始したが、そのような対

象者だけでなく、「もの忘れ看護相談」の参加者を継続的に支援していくことにも役立っていた。また、参加者の相談後の感想から、相談者の満足感は高く、不安を抱えながら生活している家族にとって、認知症の知識、情報を修得する場やもの忘れや認知症家族への対応に不安がある今の自分の状態を確認する場、安心感を得られる場、思いを吐露できる場となっていたことがわかる。新型コロナウィルス感染症が終息していない現状や超高齢化に伴う認知症高齢者増加の予測をふまえ、今後も継続して支援していく必要がある。

今年度は活動開始初年度で少しずつ参加者の増加も見られたが、広報の方法等も検討する。そして年 4 回開催している「もの忘れ看護相談」の参加者への継続的な支援方法の 1 つとして積極的に活用していきたいと考える。また、電話だけでなく、オンライン相談など ICT（Information and Communication Technology）を活用し、幅広い対象者が利用しやすく気軽に相談できる場を提供できるように方法を工夫しながら活動を発展させていきたい。

⑮もの忘れ看護相談オンラインミニ講義

○概要

本講義は、兵庫県のポストコロナ社会の具体化に向けた調査検討費補助事業の助成を受けて、老年看護学分野の教員と、地域連携・国際交流・生涯教育センター（仮）構想委員会、地域連携教育・研究センターが共催で開催した。コロナ禍の 2 度目の緊急事態宣言下で、自粛生活が長くなり、さまざまなイベントや健康講座などが中止・縮小され、受診控えや、介護サービスの利用控えがある中、住民が自宅にいながら参加できる、オンラインでのミニ講義「もの忘れ看護相談」を開催することで、ご自身や家族、介護者としての不安や悩みの解消につながるように企画をした。

○実績

オンライン講義がはじめての方でも、講義に参加できるように、事前 Zoom 説明会を集団オンラインで 2 回（第 1 回の 2021 年 2 月 10 日が 18 名の申し込みで、参加者は 15 名、第 2 回の 2 月 15 日が申し込みは 11 名で参加者は 9 名、内両方参加 4 名）、個別対応希望者には、2 月 12 日に、4 名電話で実施した。オンライン講義用の機器の使用人数は、パソコン 23 名、タブレット 6 名、スマートフォン 8 名、字が見えにくいという訴えがあったためタブレットを 2 名に貸し出した。

オンラインミニ講義は、2 月 18 日（木）13 時 30 分からのログインテスト・Zoom 操作説明会の後、14 時から老年看護学分野の坪井桂子教授が「認知症になっても、自分らしく暮らすためのひと工夫」について講義を行った。その後、質疑応答の時間を設け、もの忘れがでてきた家族への接し方や、介護の悩みについての質問に、坪井教授が回答し双方向の関りを行うことができた。40～80 代の 42 名の方の参加があり、60 代と 70 代の参加者が 85%を占めていた。神戸市の他、明石市や県外

の方（大阪府、岡山県）の参加もあった。参加動機は、「ご自身のもの忘れが不安」、「ご家族のもの忘れが不安」、「将来、もの忘れや認知症になったら不安」、「介護の悩みがある」などであった（図 4）。

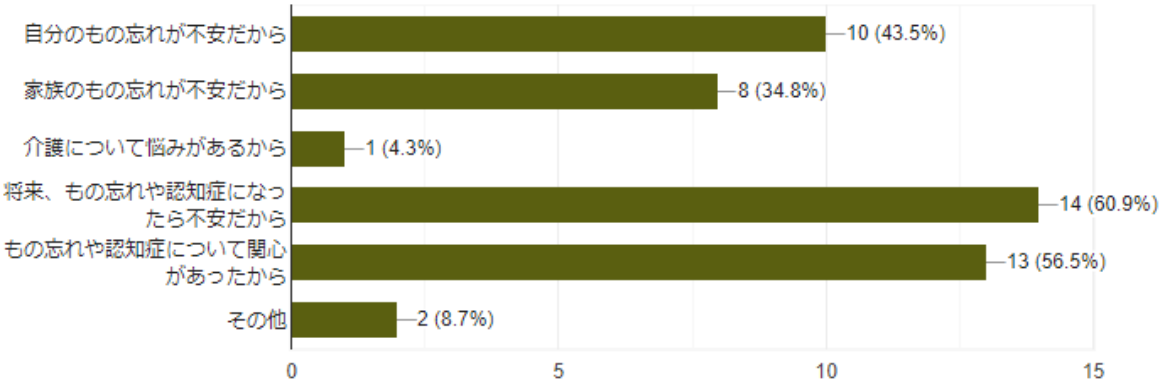


図 4．もの忘れ看護相談事前アンケートより　参加動機（複数回答可）（n=23）

初めてオンライン講義に参加する方が 78%であったが、事前 Zoom 説明会を受講者のニーズに合わせて丁寧に行ったため、講義当日は接続等のトラブルはなく、講義に参加頂くことができ、参加者からも、「初めてのオンライン講義への参加だったが、分かりやすい説明会があり、理解できて良かった」と感想を頂いた。もの忘れ看護相談の講義については、今回参加してみてご自身の生活の中で取り組みたいと思ったことがあると回答した方が、92.6%で、「大いに参考になり、今からできる具体的なこと（食事、体操、日記、メモ、社会参加など）が学べました」と感想を頂いた。「コロナ禍を気にせず、三密を回避して、自宅でくつろいで講義が聞ける。質問はミュートを解除してできたので、双方向で良かったです。」という声が聞かれ、今後もオンライン健康講座に参加したいと回答したのは、事後アンケート回答者 27 名の全員であった。コロナ禍における開催方法として、受講者から好評が得られたことから、住民に有用であったといえる。

○今後の課題

参加者からの要望として、「事前に資料が欲しい」や、「質疑応答が新鮮情報なので増やして欲しい」、「受講者同士の討論に至らず」があった。資料については、講義後、希望者に郵送した。今後は、質疑応答や、受講者同士の座談会などの開催も視野に入れて、オンライン講義の開催方法や頻度について検討する必要がある。

Ⅱ. 教育・研究活動

教育・研究活動の概要

教育に関わる主たる活動は、地域住民が本学の講義・演習・実習にボランティアとして参加する「教育ボランティア導入授業」である。

教育ボランティアに関しては、教育ボランティアの募集・登録、教員への導入授業の実施の呼びかけと取りまとめ、教育ボランティアニュースレターの発行、教育ボランティア交流会の開催がある。しかし、今年度は新型コロナウィルス感染症の流行により限られた活動内容となっている。

研究に関わる主たる活動については、各々の教員が教育ボランティア導入授業等の教育活動と連動して研究を行うことを期待しているが、各々の教員の実施状況に任せており、現在はセンターとしての支援は行っていない。

活動実績

①教育ボランティア導入授業

○概要

教育ボランティア導入授業は、2006 年度に採択された現代的教育ニーズ取り組み支援プログラム（現代 GP, 文部科学省）「地域住民とともに学び創る健康生活」の一環である『住民による教育支援』を継続して実施しているものである。

○教育ボランティア登録状況

活動継続への意思確認ができた今年度の教育ボランティア登録者数は 76 名であり、男性が 41 名（53.9%）、女性が 35 名（46.1%）、年代は 30・40 代が各 1 名（各 1.3%）、50 代が 4 名（5.3%）、60 代が 18 名（23.7%）、70 代が 40 名（52.6%）、80 代が 8 名（10.5%）であった。今年度も教育ボランティア登録継続の有無について調査を行い、「継続する」と返答いただいた方のみを登録者とした。

○教育ボランティア導入授業の実際

今年度は実施予定の教育ボランティア導入授業は、学部 10 科目であったが、実施されたのは、そのうち 3 科目となった。今年度実施された教育ボランティア導入授業の概要を表 1 に示す。なお、各科目の担当者からの報告はホームページ上に掲載している。

表 1　2020 年度に実施した教育ボランティア導入授業（学部）の概要

	実施日	科目名	担当教員	実施場所	対象学生	ﾎﾞﾗﾝﾃｨｱ参加数
1	9 月 18 日, 19 日	多職種連携 I	片倉、丸尾、宇多、谷	神戸学院大学	1 年生	6 名
2	12 月 2 日	老年健康生活支援論	坪井	西館講義室	2 年生	1 名
3	2021 年 2 月 15 日～26 日	健康生活支援学実習	詳細は②健康生活支援学実習を参照			

②健康生活支援学実習

教育ボランティア導入授業の 1 つである健康生活支援学実習は、「地域の人々の生活を理解し、健康な生活を支援する能力を育成する」ことを目的に平成 19 年度より実施しており、今年で 14 年目を迎える科目である。本実習は、西区および須磨区の民生児童委員協議会および地域住民の皆様にご協力いただき、地域に住む人々の生活や地域を知ることを通じて、人と関わる力を養い、その人にとっての「健康」とは何か、健康と地域のつながりや健康への支援の在り方を考えることを目標としている。2 年生の後期に実施し、実習期間は 2 週間、西区の 10 地区と須磨区（北須磨地区）の 2 地区の計 12 地区で行っている。実習では、学生が実習にご協力いただいた方のご自宅への訪問、その方が普段の生活の中で行っている様々な活動への同行、また、地域に学生が出向いて様々な施設や地域の集まりに参加しながら、地域で暮らす人々の生活や健康についての思い、地域についての学びを深めている。

2020 年度は 2021 年 2 月 15 日（月）～26 日（金）に実施した。今年度は新型コロナウィルス感染症の拡大に伴う緊急事態宣言を受け、新たに本学で設定された本学の新型コロナウィルス感染症に伴う活動制限ガイドラインにおいて「レベル 2」（原則、遠隔実習）の状況であった。そのため、例年とは異なり、教育ボランティアのご自宅への訪問や地域活動への参加はできず、オンライン実習を中心として、各地区の状況に合わせて工夫をしながら実習を行った。実習の体制を表 2 に示す。

今年度の実習では、学生が 2～3 名 1 組となり、教育ボランティアの方々に電話や ZOOM 等を用いてインタビューを行い、生活や暮らしの様子、健康に気をつけていること、ご家族や地域への思いや健康に関する考え方等について伺った。また、教育ボランティアの方々と一緒に活動に参加することはできなかったが、活動を縮小したり方法を変更しながら地区活動を継続している地域では、教員が訪問して地区活動の様子を ZOOM を通して学生と共有したり、地区会長等に地区活動についてお話いただく機会を設ける等を試みた。さらに、地区探索では、学生は感染予防対策を取りながら地域を歩き、地域の特徴を自分たちで考えたり、対人距離を空ける、インタビュー時間を短くする等の工夫を行いながら街頭インタビューを行い教育ボランティアの方々と地域に住む人々の考え方に違いがあるのか等、自分たちが抱いた疑問を明らかの計画を立案し、積極的に行動していた。さらに、教育ボランティアの方々へのインタビューや地区探索後には、学生間で毎日意見交換を行い、互いに見たこと、聞いたこと、考えたことを共有することで、学びを深めていた。実習最終日に行った学内での合同カンファレンス（学習成果発表会）では、それぞれの学びの共有をして、自分たちが実習をした地区や学びについての共通点や相違点について理解を深めた。

この実習を通して、学生は、健康観や価値観は個人によって様々であり、それら

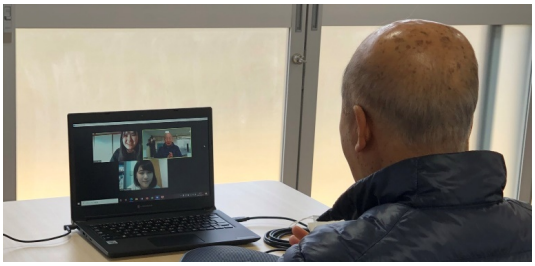
に至るまでに様々な背景があることについて理解することができた。同時に、教育ボランティアの方々から地域の課題を聞いたり、沢山の励ましを受け、これから自分たちが看護職としてどうあるべきか、その人に寄り添った支援とは何かを考え続けることが重要であることに気づくことができた。

表２　2020 年度 健康生活支援学実習の体制

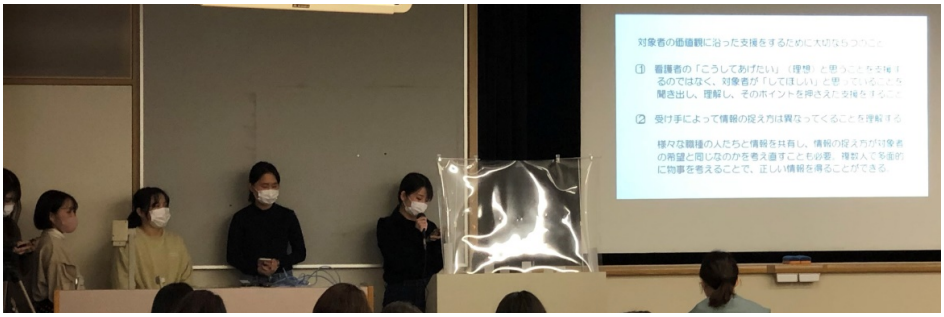
地区名		担当教員名	教育ボランティア協力人数
西区	学園都市	時本，岩本	８名
	伊川谷	岩井，岩本	８名
	井吹台	稲垣，石橋	９名
	長坂	樋口，石橋	８名
	西神西	西村，玉田	８名
	桜が丘	野寄，玉田	７名
	押部谷西	藤岡，高山	８名
	押部谷東	山下，高山	９名
	平野	清水，小山	８名
	神出	岩崎，小山	７名
須磨区	竜が台	吉川，丸尾	８名
	菅の台	関口，丸尾	８名

※ 教育ボランティア協力人数は、上記の人数の他に地域のサークル活動に参加されていた地域住民の皆様にもご協力いただいた。

（オンラインインタビューの様子）



（実習最終日合同カンファレンスの様子）



③教育ボランティアニュースレター

教育ボランティアニュースレターは年に 1～2 回発行している。今年度は第 25、26 号となるニュースレターを 2020 年 4 月、2021 年 2 月に発送した。内容は「大学の近況」「教育ボランティア導入授業の報告」についてであった。詳細は、ホームページで公開している。

「教育ボランティアニュースレター」の第 25 号ができましたので、お届けいたします。

神戸市看護大学
〒651-2103　神戸市西区学園西町 3-4

教育ボランティアニュースレター

第 25 号
発行月　令和 2 年 7 月

大学の近況をお伝えします！

新型コロナウィルスに伴う緊急事態宣言を受けて、本学では4月の新学期当初からオンライン授業を開始しました。教員はオンライン授業と並行し、兵庫県や神戸市からの委託を受けて新型コロナウィルスの電話相談や軽症者宿泊療養施設での支援を行いました。6月からは、ようやく学生が週1回ですが学年別に曜日を分けて登校するようになりました。そんな本学の状況についてご報告いたします。

オンライン授業の様子

4月の新学期に合わせてインターネット回線を通じてのオンライン講義を開始しました。初めての試みだったため、教員も苦戦しながら準備に奮闘しました。講義は、教員から一方的に伝えるだけではなく、グループワーク等もできるようになっています。学生は自宅に居ながらも画面を通じて積極的に質問や意見を述べてくれます。教員は学生から刺激を受けながら、学生の協力を得て、新鮮な気持ちで工夫しながら講義を行っています。

いちかん手作りマスクプロジェクト

感染拡大に伴い、市場でマスク不足が深刻化していたことから、布マスクを作成し必要としている方に届けたいと学生と教職員有志による「いちかん手作りマスクプロジェクト」が発足し、趣旨に賛同した学生がマスクの作成を行いました（作成経費は教職員の寄付）。作成された手作り布マスクは、励ましのメッセージを同封し、療養施設を退所される
療養者の皆様にお届けしました。

新型コロナウィルス電話相談
軽症者宿泊療養施設での支援

看護師資格のある有志の教職員と学生・大学院生が、保健所業務の電話相談支援を行いました。兵庫県には3月下旬～5月下旬まで延べ26回、神戸市には電話相談の後方支援および検疫所から連絡があった健康観察者の健康確認について4月～5月下旬まで延べ54回の支援を行いました。

新型コロナ感染症軽症者宿泊療養施設には神戸市からの協力要請を受け、開設初日から5月末まで継続して24時間体制で延べ99回看護教職員を派遣し、看護業務および施設の看護体制構築支援、療養者へ配布するパンフレットの作成支援を行いました。

新委員長からの挨拶

2020年4月から地域連携教育・研究センター運営委員会委員長になりました 片倉直子 と申します。

現在、教育ボランティアの皆様に授業でご指導いただけないのが学生・教職員一同大変残念ですが、「三密」を避けられる準備が整いましたらあらためてご連絡いたしますのでどうぞよろしくお願いいたします。

事務局・新担当者からの挨拶

このたび教育ボランティア事業の事務担当となりました 中島明子 です。教育ボランティア導入授業が再開され、皆様にお会いできる日が来るのを楽しみにしております。どうぞよろしくお願いいたします。

編集・発行：神戸市看護大学
地域連携教育・研究センター

以前に「延期」とご連絡しておりました 2019 年度教育ボランティア交流会（2020 年 3 月開催予定）は中止いたします。2020 年度については改めてご連絡いたします。

「教育ボランティアニュースレター」の第 26 号ができましたので、お届けいたします。

神戸市看護大学
〒651-2103　神戸市西区学園西町 3-4

教育ボランティアニュースレター

第 26 号
発行月　2021 年 2 月

今年度の「教育ボランティア交流会」の中止のお知らせ

新型コロナウィルス感染症の再拡大に伴う2度目の緊急事態宣言を受けて、**毎年行っておりました教育ボランティア交流会は、昨年度に引き続き、今年度も「中止」とさせていただきます。**また皆様とお会いできることを楽しみにしております。どうぞご自愛いただきますようお願い申し上げます。

～ 今年度卒業をする学生からのメッセージ ～

教育ボランティアの皆様には大学1、2、3年生でお世話になりました。私たちは、普段の学内での授業では、学生同士か、自分よりも看護の知識のある教員と話しあうばかりでした。そのため、誤った知識をもとに話をしても、訂正してもらえる環境にいたといえます。しかし、初めて教育ボランティアさんとお話しさせていただいた際に、ある学生が間違った情報を教育ボランティアさんに伝え、不安にさせてしまったという経験をしました。その話を聞き、自分たちは資格を持っておらず、看護師ではないといえども、看護学生として、専門職の一員となる責任を持ち、正しい情報を正確に伝えることが必要なのだと知ることができました。実習の際に落ち着いて患者さんと向き合い、正しい知識を責任持って伝える意識を持てたのは教育ボランティアの皆様のおかげだと考えております。本当にありがとうございました。　／4年　垣東　真衣

私たちは普段、違う世代の方々とお話する機会があまりありません。そのため、はじめ教育ボランティアさんと関わる際には、どのようなお話をすればよいのかわからずにいました。その時には皆さんから話を振ってもらったり、ケアをさせていただく際にも率直な意見をいただくなど、不慣れな自身を客観視する機会を多くいただきました。病院実習では自分が普段お会いしない世代の方と出会い、その方々の生活について考えていくことになります。その時、教育ボランティアの方々からいただいた患者視点の意見が、ケアを受ける相手に自分の行為がどのような影響を与えているのかということを理解するのにとても役立ちました。患者さんはケアを受ける側だから、と自分の思いを遠慮してしまうこともあります。しかし、その中でも様々な思いを抱えながら看護を受けているということを常に忘れずにいられるのは、一番最初に教育ボランティアの方々と関わったからではないかと思います。とても貴重な学びの機会をいただき、本当にありがとうございました。／4年　稲吉　未希子

今年度の教育ボランティア導入授業のご報告（2020年9月／12月実施）

今年度は10科目で教育ボランティア導入授業を行う予定でしたが、新型コロナウィルス感染症の拡大状況を受け中止を余儀なくされました。その中で感染状況が落ち着いた頃に2科目を実施することができました。

9月に神戸学院大学と合同で実施した「多職種連携Ⅰ」演習では、6名の教育ボランティアの方に生活や療養・介護体験を聞かせていただきました。経験談を通して、他学部の学生と病気を持ちながら生活することはどういうことか、専門職ができることはなにかを話し合うことができました。

12月の「老年健康生活支援論」では、多くの資料を提示しながら、これまでの生活史や現在の生活状況を語っていただきました。学生には想像もつかない様々な体験をされてきたことや新型コロナウィルス感染症による現在の生活への影響を知り、お一人お一人の生きてこられた人生や生活を理解して看護することの大切さを考えることができました。

編集・発行：神戸市看護大学
地域連携教育・研究センター

【事務局よりお知らせ】今年度着任した事務局担当の中島が退職いたしました。
現在は 宮本 が担当しています。どうぞよろしくお願いいたします。

④教育ボランティア交流会

教育ボランティア導入授業の充実ならびに教育ボランティアの方々と教員、学生の交流を図ることを目的に毎年実施されている。しかし、今年度は、新型コロナウィルス感染症の流行に伴う緊急事態宣言の発出や外出自粛要請等の状況を鑑み、交流会は中止し、ニュースレターによる報告とした。

⑤学生ボランティアの活動状況とその支援

○概要

学生の自主的活動として、以下のサークル活動がある。それ以外にも学生は自主的にボランティア活動を行っている。

なお、本学は、学生のボランティア活動を通じて、援助者としての自己の基盤作りをすることを目的に、「ボランティア活動」を科目として設定し、活動を支援している。

○主なボランティア活動の活動状況とその支援

	団体名	顧問
1	アロマサークル	江川幸二
2	SCHOP（スコップ）	池田清子
3	ボランティア部	池田清子
4	コーラルレイン	二木啓
5	K-spring peer/ピアカウンセリング	高田昌代
6	まほうのハッぱー	＊

＊学生の自主運営で行っている活動であるため、顧問は設置されていない

⑤－１アロマサークル

○今年度の活動内容

今年度は新型コロナの影響で、ほとんど活動はできませんでした。例年、同窓会の先輩方とコラボで行っているあざみ祭の時のアロママッサージも、直接のお身体に触れるため残念ながら実施できませんでした。

アロマの精油には殺菌作用があるといわれていますが、コロナウィルスに効果があるのかもわからず、感染拡大につながることは避けなければなりません。

今後は、ウィズコロナ時代でアロマサークルとしてどのような活動ができるのかを模索していきたいと思います。

⑤−2 SCHOP（スコップ）

○今年度の活動内容

2019 年度に引き続き、活動は休止している。

⑤−3 ボランティア部

○今年度の活動内容

ボランティア部は平成 15 年から中央区の災害復興住宅で健康支援の活動を行なっている。今年度は Covid-19 によりコミュニィセンターが閉鎖され、10 月までの活動は中止した。この閉鎖期間中に部会を開催し、地域の高齢者のこころと身体の状態が悪化することを少しでも予防するため、住民に応援メッセージと熱中症対策用の飴を送ることになった。また、11 月頃からコミュニティセンターが使用できるようになったため 11 月 7 日（土）の 10～12 時に傾聴ボランティアを行った。感染防止策としてビニール製の遮蔽板を作成し、マスク着用、アルコール消毒、換気を徹底し、学生が 2 人 1 組となりお話しを伺った。参加者は 4 名であったが、久しぶりのおしゃべりの機会となったようで、会話は弾み、参加者に笑顔がみられていた。 1 月には再び感染拡大期となったため手作りの年賀状を作成し、少しでも明るい気持ちで新年が迎えられるよう願っている。2021 年の 3 月 13 日（土）は本年 2 回目の傾聴ボランティアを行った。参加者は 6 名であった。ボランティアスタッフは、学生 8 名、教員 3 名であった。生活の様子や健康で気がかりなことなどについてお話しを伺った。今後も新型コロナの感染状況によっては対面での活動がむずかしい可能性があるため、電話訪問の要望を尋ねたところ複数名から希望があったため、今後、電話訪問についても検討することになった。

○活動頻度

傾聴ボランティア　2 回（11 月と 3 月）

暑中見舞いと年賀状の作成（10 名分）

○学生参加者数

活動 1 回につき 4～5 名

暑中見舞いと飴のパッケージ（7 月）

丑年の年賀状（１月）

HAT 神戸にて傾聴ボランティア開催（2021 年 3 月）

⑤−4 コーラルレイン

○今年度の活動内容

今年度はコロナウイルス感染症拡大の影響で、通常の練習も含めほぼ全て活動できず、学内活動としてのオンラインによる部活動紹介や、１２月の新歓での簡単な紹介(歌は無し)にとどまりました。

また、部員数６名のうち３名が４年生であったため、来年度の活動が心配でしたが、１２月の新歓にて新3回生の2名が加入し、年度末の時点で部員数は５名です。
合唱は、発声そのものが表現であるため、まだ活動がしにくい状況ではありますが、創意工夫しながら、次年度４月の新歓、５月のあざみ祭から活動を再開させたいと思います。

⑤−5　思春期ピアカウンセリング（学内活動と学外活動の同時活動）

○今年度の活動内容

思春期ピアカウンセリングは、思春期にあるピアカウンセラー(大学生や専門学校生など)が同世代の人々を対象として生と性に関する健康教育を行う教育方法の１つである。世界のさまざま国においてもこの手法が有効であることが実証され、日本においても厚労省の健やか親子 21 に取り入れられるなど思春期保健活動の中にとり入れられている。現在では、全国各地で思春期ピアカウンセラーの養成、思春期ピアカウンセリング・ピアエデュケーションが行われている。

兵庫県では、平成 16 年度よりひょうご思春期ピアカウンセリング研究会が思春期ピアカウンセラーを養成し、兵庫県内で活動を行っている。兵庫県の思春期ピアカウンセリング活動は、本学の学生が中心となり、積極的に取り組んでいる。現在のこの活動は大きく分けて４つある。１つは、**中学校、高校の集団を対象に、神戸市内はもとより兵庫県下の中学校、高校に生と生殖の自己決定の支援のための健康教育を実施している。**各学校から依頼があれば「自分の宝物」「わたしとわたしとあなた」などのテーマで、友人関係・恋愛関係でのピアプレッシャーや性感染症（STI）や妊娠、デート DV など、自分を大切にするための生と性の自己決定の内容を取り入れている。2 つめは、**個別のカウンセリング**である。須磨区名谷駅近くのユースプラザや中・高校において、中高生や大学生の個別や小集団でのピアカウンセリングであるピアルームを開催している。3 つ目は、社会へＨＩＶやデートＤＶの啓発活動の実施である。4 つめは、ピアカウンセラーの後輩育成と全国のピアカウンセラーとの情報交換・交流である。

今年度は、新型コロナ感染症拡大防止のため、中学・高校の学校教育、啓発活動などが制限された。その中でも、思春期ピアカウンセリングの受講が生徒さん方にとって必要と判断されたところには、学校との調整のもと感染防止策を最大限駆使して実施した。

○今年度の活動回数と学生参加者数（表 3、4）

表 3　　中学校、高校への思春期ピアカウンセリング・ピアエデュケーション

No	実施日	曜日	学校名	時間	対象	参加人数	ピアっ子人数
1	9月17日	（金）	宝塚高校	13：30～14：20	看護選考生2年生	15 人	4 人
2	9月21日	（火）	宝塚高校	13：30～14：20	看護選考生3年生	15 人	5 人
3	9月23日	（水）	須磨翔風高校	13：00～14：45	2年生1組	40 人	3 人
4	9月23日	（水）	須磨翔風高校	13：00～14：45	2年生2組	40 人	3 人
5	9月23日	（水）	須磨翔風高校	13：00～14：45	2年生3組	40 人	3 人
6	9月30日	（水）	須磨翔風高校	13：00～14：45	2年生4組	40 人	3 人
7	9月30日	（水）	須磨翔風高校	13：00～14：45	2年生5組	40 人	3 人
8	9月30日	（水）	須磨翔風高校	13：00～14：45	2年生6組	40 人	3 人
9	12月14日	（月）	姫路市立高校	16：00～18：00	野球部	22 人	4 人
10	2月17日	（水）	神戸松蔭中学校	11：20～13：00	2年生1組B	19 人	4 人
11	2月17日	（水）	神戸松蔭中学校	11：20～13：00	2年生1組A	20 人	4 人
12	2月17日	（水）	神戸松蔭中学校	13：40～15：20	2年生2組	25 人	4 人
13	2月17日	（水）	神戸松蔭中学校	13：40～15：20	2年生3組	30 人	4 人
計（延べ数）						386 人	47 人

表 4　ピアサポートルーム

No	開催日	曜日	学校名	時間	対象	来所者数	ピアっ子人数
1	9月23日	（木）	ピアサポートルーム（名谷）	18：00～20：00	希望者	15 人	4 人
2	10月26日	（火）	ピアサポートルーム（名谷）	18：00～20：00	希望者	2 人	9 人
3	11月16日	（火）	ピアサポートルーム（名谷）	18：00～20：00	希望者	10 人	7 人
4	12月23日	（木）	ピアサポートルーム（名谷）	18：00～20：00	希望者	10 人	13 人
5	3月24日	（水）	ピアサポートルーム（名谷）	18：00～20：01	希望者	3 人	3 人

○成果

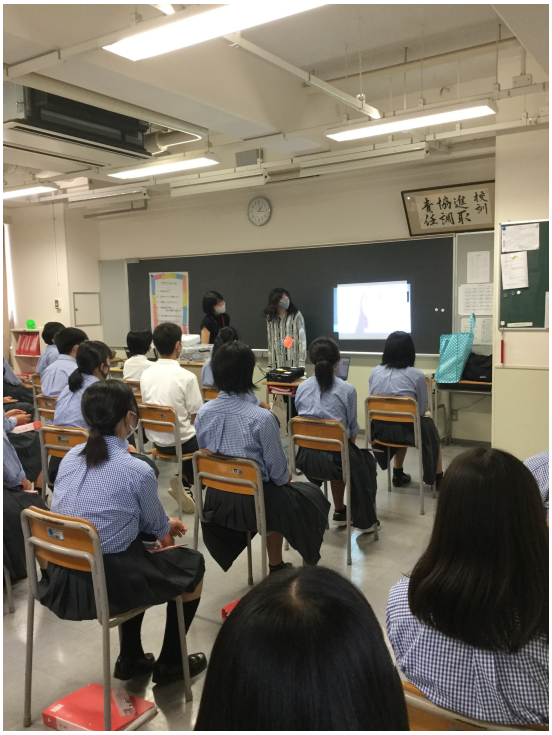
・中学校、高校への思春期ピアカウンセリング・ピアエデュケーション

今年はコロナ禍で感染予防対策として、ピアっ子の人数を少な目にしたり ZOOM を使ったり、グループワークの時間を短くするなどの工夫を行いながら行った。参加者からは、例年同様、身近な大学生でよかった、分かりやすく楽しかった、自分を大事にしようと思った、同じクラスでも他の人の意見を聞けて良かった、などの意見がたくさん寄せられた。思春期ピアカウンセラーとしては、毎年行われている養成講座でブラッシュアップをしたり、デート DV や SNS の問題に関する講習会を聴いて知識を増やしたりと、自己研鑽を積んでいる。

・ピアサポートルーム

名谷は継続して行っていることもあり、須磨翔風高校の高校生が多く寄って話している。思春期ピアカウンセリングを行った中学校や高校で、思春期ピアカウンセリング修了後行う時には、進学のことや部活のことなどを話にくる生徒が多くみられる。

特に今年度は、自粛期間が長かったため少し距離を取りながらも、一緒に話をするようにした。しかし、例年に比べて来訪者は少なめであった。



⑤−6　まほうのハッぱー（学外活動）

　月に1回第3土曜日に大学生が企画した、普段子どもたちだけでは出来ないような身体を使った遊びや、工作などに子どもたちを呼び、大学生と子どもが一緒になって楽しく遊んでいます。

まほうのハッぱーの由来が、

「まほうの」…いろいろ作り出すこと

「ハッ」…はっ！とひらめく

「ぱー」…手のひらのぱーで表現する

というものであるので、子どもたちに楽しんでもらいたい、何か新しいことに挑戦したり、何か得られるものがあってほしいという思いで活動しています。

○今年度の活動内容

5月:コロナにより活動なし

6月:コロナにより活動なし

7月:zoomでゲーム実施

8月:外で水遊び、室内で夏遊び（紙の魚釣りや、ダンボールで作ったスイカ割り）

9月:zoomでクイズ大会

10月:おばけやしき

11月:陶芸（ブローチ作り）

12月:クリスマスパーティ(様々なゲームで遊ぶ)

1月:外遊び（ドッジボール、おにごっこ、王様取り）

2月:外遊び（おにごっこ、玉入れ、だるまさんがころんだ）

○活動頻度

イベントは月1回第3土曜日に行っています。イベント準備のために毎週1回約2時間会議を行っています。

○学生参加者数

神戸市看護大学　16名、神戸芸術工科大学　7名、流通科学大学　6名、その他　2名

まほうのハッぱー　活動の様子

Ⅲ. 国際交流活動

国際交流活動の概要

国際交流委員会は、学生および教員、地域の看護・医療・福祉専門職の国際的教育・研究の機会に関する事項を担当している。

2020 年度の活動は昨年度末以来の新型コロナウイルス感染拡大による重大な影響があった。代表例として、学部選択科目「海外看護学研修」を非開講とする措置を取った。しかしながら、そのコロナ禍であればこそ新たな試みにチャレンジできた、と言える側面もあった。

活動実績

①英語ネイティブ教員による English Lunch Time

2019 年度に引き続き、English Lunch Time を開催した。これは、昼食の時間を活用して英会話を楽しみつつ、会話を通して外国文化や、国境を超えた視点や考え方などに触れる企画である。2020 年度は対象範囲を全学的に拡大して実施し、特に学生たちの異文化理解が深まったという印象を受けた。他にライティングとプレゼンテーションのセミナー、修士論文の英語タイトルについての相談・指導を実施した。その成果として、5 名の学生が「研究演習」の最終成果物である抄録を英文で記述した。これは我々が知る限り、本学初である。

②米国ワシントン大学によるオンライン講演会

海外の提携大学とは、例年であれば「海外看護学研修」や在外研究の機会を通じて、学術交流を維持発展させるための活動を実施してきているところであった。2020 年度においては、こうした恒例の取り組みに代わって、米国ワシントン大学看護学部の 3 名の教員によるオンライン講演会を 2020 年 2 月 10 日に実施した(次頁のリーフレットを参照)。その結果、学内外からおよそ 100 名に上る受講者が Zoom からエントリーし、質疑を含め 2 時間半にわたる講演を聴講した。講演後の反響は大きく、受講者の一人である駒沢女子大看護学部教員から、本講演会資料を学内 FD で利用したい旨の申し出があり、各講師の承諾を得たうえで利用を許可した。

③ベトナム・ダナン大学とのオンライン交流イベント

上述の米国ワシントン大学と同じく本学の提携先であるベトナムのダナン大学についても、「海外看護学研修」の代わりとして。両校の学生交流イベントを 2021 年 1 月 25・26 日にオンライン実施した。ダナン大学からは学部長を初め、多数の看護学科教員や学部学生らの参加を得ることができた。

なお、類似の活動として、大学院科目「国際助産活動論」においても、2021 年 2 月 15～17 日にラオスの国立保健科学大学の教員、学生や、国立病院看護部、周産期部門とのオンラインによる交流を実施した。

参加費無料
（事前予約制）

神戸市看護大学　国際交流委員会主催
オンライン講演会

コロナ禍でのワシントン大学の臨床看護教育における大学・臨床協働

Academic-Clinical Collaborations In Clinical Nursing Education at the University of Washington during the COVID-19 Pandemic

［日時］ 2021年2月10日（水）9：30～12：00

［開催方法］ オンライン（zoom使用）

［講師］ ＊詳細は裏面をご覧ください。

Hilaire J. Thompson, PhD, RN, ARNP, FAAN, FGSA
ワシントン大学看護学部大学院 プログラム主任

Yoriko Kozuki, Ph.D., PMHNP-BC, ARNP
ワシントン大学看護学部 准教授

Tatiana Sadak, Ph.D., PMHNP-BC, ARNP
ワシントン大学看護学部 准教授

［お申込み・お問い合わせ］

＊参加希望の方は、【1月29日（金）17:00まで】に、
次のURLから申し込みをお願いします。
URL……

＊お申込みいただいた方には、講演前にzoomの入り口のURLをお送りいたします。

＊その他、ご不明点はお問合せください。

〒651-2103
神戸市西区学園西町3-4　神戸市看護大学 事務局
TEL:078-794-8080（代）
E-mail：●●●

●講演の詳細

コロナ感染拡大は、ワシントン大学看護学部と研究科の学部生・院生たちの臨床実践に影響を及ぼした。その結果、学部生の臨床教育はよりシミュレーションに基づいたものとなり、ワシントン大学は臨床の機会を増やすために新たなプログラム（例えば、シアトル州キング郡公衆衛生【Public Health-Seattle King County : PHSKC】のためにコロナホットラインのスタッフを送るなど）を開発した。特に、ワシントン大学看護学部は、ワシントン州知事のコロナ戦略のもと、より安全な臨床体験に向けた個人用防護具の提供、緊急基金によるサポート、ほぼ全ての授業が突然オンラインへと移行した事態に対する援助など、学生たちに多様なかたちで支援を提供した。臨床機関の要望により対人臨床学習は中断されたにもかかわらず、看護教育プログラムの認定や高度実践看護師の承認と資格付与を行う国家機関は、最低500時間以上の直接的患者ケアの臨床体験の必要性を改めて表明した。そのため、看護実践博士後期課程【The Doctor of Nursing Practice : DNP】プログラムは、臨床機関（ダウンタウン緊急サービスセンター【Downtown Emergency Service Center : DESC】、キング郡公衆衛生【PHSKC】）との協働に取り組んだ。このことに応じて、DNPプログラムは学生と教員の遠隔医療（テレヘルス）のトレーニングや実践機会を強化した。本レクチャーでは、DNPプログラムのコースの一つであるPsychiatric Mental Health Nurse Practitioner【PMHNP】が臨床ローテーションに遠隔精神医学を取り入れた様子について論じ、周縁化された社会集団、特に収監された人々の間でのコロナ感染拡大を軽減しようと努める大学・臨床協働の取組の例を挙げる。

●講師のプロフィール

Hilaire J. Thompson, PhD, RN, ARNP, FAAN, FGSA

Dr. ThompsonはBiobehavioral Nursing and Health Informaticsの the Joanne Montgomery Endowed Professorで、ワシントン大学看護学部大学院プログラム主任である。Dr. Thompsonは公認看護師（registered nurse)であり、ナース・プラクティショナーでもある。また、特に高齢者のトラウマと加齢性の不均衡を中心とした大人の外傷予防と処置に焦点を当てた継続研究プログラムに取り組んでいる。この研究は複数の表彰を受けており、その中にはWashington State Academy of Sciences and Sigma's International Nurse Researcher Hall of Fameへの就任も含まれる。次世代の学者の指導に専心し、彼女はthe Omics and Symptom Science Training Program in the School of Nursing とthe Education and Training Core at the Harborview Injury Prevention and Research Centerの両方で共同主任を務める。

Yoriko Kozuki, Ph.D., PMHNP-BC, ARNP

Dr. Kozukiはワシントン大学看護学部Biobehavioral Nursing and Health Informaticsの准教授で、連邦政府のHuman Resources and Services Administration【HRSA】が資金提供するワシントン州Corrections Advanced Nursing Education Workforce【ANEW】プログラムの企画主任である。Dr. Kozukiは国家資格を持つPMHNPであり、ワシントン州の認可を受けたARNPでもある。同時に、Dr. KozukiはAmerican Psychoanalytic Association/International Psychoanalytic Associationで訓練を受けたpsychoanalystである。Dr. Kozukiの研究・臨床の専門領域は精神医学とメンタルヘルスで、周産期メンタルヘルス、統合失調症、周縁化され十分なサービスを受けることができない人々の慢性痛とオピオイド使用障害の併存症などを含む。

Tatiana Sadak, Ph.D., PMHNP, RN, FAAN, FGSA

Dr. Sadakはワシントン大学看護学部のGeriatric Mental Health Nursingの准教授で、学部教育の主任とDementia Palliative Education【DPEN】プログラムの主任を務める。Ph.D. prepared nurseであり、老年精神医学と神経変性障害を専門とする専門精神保健ナース・プラクティショナー【Certified Psychiatric Mental Health Nurse Practitioner】である。Dr. Sadakの研究と手法は、認知症と共に生きる患者と彼らのケア・パートナーへのヘルスケアの展開で、エビデンスを生産し、測定ツールを作成、また、ケア・パートナーが自らの健康やウェルネスを犠牲にすることなくケアー・レシピエントの回避可能な健康危機を予防し健康を管理するため、医療従事者と家族の協働をサポートするための介入を開発している。この研究が認められ、the American Academy of Nursingとthe Gerontological Society of AmericalはDr. Sadakをフェローに選出した。また、Dr. SadakはDistinguished Educator in Gerontological NursingとTop Doctor/Nurse Practioner in Psychiatryを受賞し、老年医学看護学に取り組む顕著な研究論文が認められている。

【別添資料】

看護専門職講座に参加した対象者の
新型コロナウィルス感染症に関するアンケート結果

1．はじめに

兵庫県訪問看護ステーション連絡協議会との共催で実施した今年度の看護専門職講座は、8 月のコロナ禍で実施した。地域で活躍する訪問看護師が新型コロナウィルス感染症の予防対策に不安を抱えながら実践していると考えられたことから、本誌 p32 で報告した本講座の満足度や活用できるかといった内容以外に、新型コロナウィルス感染症に関する内容のアンケートも同時に行った。ここでは、そのアンケート結果を報告する。

2．アンケートの概要

新型コロナウィルス感染症に関する内容のアンケートとして、以下の内容を尋ねた。

1）参加者全員へのアンケート内容

参加者全員には、属性として性別、年齢、新型コロナウィルス感染症への恐怖について尋ねた。新型コロナウィルス感染症への恐怖は新型コロナウィルス恐怖尺度を用いた。これは、Ahorsu DK ら（2020）が開発した Fear of Coronaviruss-19 Scale を、太刀川ら（2020）が日本語版にしたものである。質問項目は 7 つで、それぞれ「全くあてはまらない」から「とてもあてはまる」までの 5 件で尋ねる。得点は 1～5 点、総得点範囲は 7～35 点であり、得点が高いほど新型コロナウィルスへの恐怖が強いことを示す。

2）訪問看護ステーション所属の参加者へのアンケート内容

訪問看護ステーション所属の参加者には、上記 1）に加えて、訪問看護経験年数、職位、所属する組織での感染症対策の取り組み、コロナ禍の実践で困っていること（自由記載）について尋ねた。所属する組織での感染症の取り組みについては、「児施設は感染症対策に積極的に取り組んでいる」「児施設では十分な感染症対策教育が行われている」などの 5 つの質問項目を作成し、それぞれ「とてもそう思う」～「全くそう思わない」の 5 件で尋ねた。

なお、アンケート回答者には、アンケートに回答する前に、今後の研修会の企画や評価を検討すること、個人は特定されないこと、本アンケートの結果を取りまとめることや発表することに同意できるかを尋ね、「同意する」にチェックを入れて回答した者だけをアンケートとして取りまとめた。

3．アンケートの結果

アンケートの協力に同意が得られたのは 57 人であった。回答者の平均年齢は 49.7±7.9 歳、性別は男性が 2 人（3.5%）、女性が 55 人（96.5%）、そのうち、訪問看護ステーション所属の者は 53 人（93.0%）であった。

訪問看護ステーション所属の者（53 人, 100%）の平均年齢は 50.0±7.7 歳、性別は男性が 2 人（3.8%）、女性が 51 人（96.2%）であった。また、訪問看護師歴は平均 12±8.1 年、職位は管理者が 30 人（56.6%）、スタッフが 17 人（32.1%）、感染症対策などの担当者が 4 人（7.5%）、所長が 2 人（3.8%）であった。

1）新型コロナウィルスへの恐怖

新型コロナウィルス恐怖尺度得点の結果を表 1 に示す。

表 1　新型コロナウィルスへの恐怖尺度得点の結果

	平均±SD	
	全回答者 N=57	訪問看護師 n=53
1．新型コロナウィルスがとても怖い	3.5±1.0	3.6±0.9
2．新型コロナウィルスについて考えると不快になる	2.9±1.1	3.0±1.1
3．新型コロナウィルスについて考えると手汗をかく	1.7±0.8	1.7±0.8
4．新型コロナウィルスで命を失うことを恐れている	2.5±1.0	2.6±1.2
5．ｲﾝﾀｰﾈｯﾄで新型コロナウィルスのニュースや話題をみると緊張したり不安になったりする	2.6±1.2	2.6±1.2
6．新型コロナウィルス感染が心配で眠れない	1.7±0.8	1.7±0.8
7．新型コロナウィルス感染について考えると、心拍が早くなったり動悸がしたりする	1.7±0.7	1.7±0.7
総得点	16.6±4.8	16.9±4.8

全回答者（N=57）と訪問看護師のみ（n=53）の得点を比較すると、全回答者より訪問看護師の方が若干ではあるが得点が高い傾向があると考えられた。これは、回答者の 9 割以上が訪問看護師であるため、統計的に有意な差は出ないと考えられ

るが、訪問看護師の方が新型コロナウィルス感染症を恐怖と捉えている可能性が伺える。

2）訪問看護師が所属する組織での感染症の取り組みについて

訪問看護師が所属する組織での感染症の取り組みの結果を表 2 に示す。

5 つの質問項目すべてで「とてもそう思う」「まあまあそう思う」と答えた者は 7 割以上であった。その中で、「自施設では十分な感染症対策教育が行われている」「自施設では感染症対策製品が十分に確保されている」で「どちらともいえない～全くそう思わない」と答えた者がそれぞれ 11 人（20.8%）、14 人（26.4%）とやや多く、施設によっては差がある可能性が考えられた。また、個別の回答をみると、自施設で十分な感染症対策が行われていない、感染症対策製品が十分に確保されていないと答えている者は、合わせて「自施設は質の高い看護を提供している」「私は自施設で働くことを誇りに思う」の質問項目の点数も低い傾向があり、感染症対策への取り組みや教育が、看護の質や所属する職員のモチベーションに影響がある可能性も考えられた。

表 2　訪問看護師が所属する組織での感染症の取り組みについて　　n=53

	件（%）				
	全くそう思わない	あまりそう思わない	どちらともいえない	まあまあそう思う	とてもそう思う
1. 自施設は感染症対策に積極的に取り組んでいる	1 (1.8)	1 (1.8)	2 (3.8)	28 (52.8)	21 (39.6)
2. 自施設では十分な感染症対策教育が行われている	2 (3.8)	0 (0.0)	9 (17.0)	32 (60.4)	10 (18.7)
3. 自施設では感染症対策製品が十分に確保されている	1 (1.8)	4 (7.5)	9 (17.0)	32 (60.4)	7 (13.2)
4. 自施設は質の高い看護を提供している	0 (0.0)	1 (1.8)	5 (9.4)	34 (64.2)	13 (24.5)
5. 私は自施設で働くことを誇りに思う	0 (0.0)	1 (1.8)	7 (13.2)	27 (50.9)	18 (34.0)

3）コロナ禍の実践において困っていること

コロナ禍の実践において困っていることの自由記述の結果を表 3 に示す。

コロナ禍の実践において困っていることとして、「感染予防具が不足している」「感染症対策が不安である」「感染予防対策への認識の差がある」「感染予防対策の程度

に迷う」「情報収集や相談のしづらさがある」「情報共有がされにくい」「利用者への不安の対応に悩む」があげられていた。新型コロナウィルス感染症の対応を求められて半年という時期でもあり、感染予防具の不足がまだまだ解消されていないこと、どこまで感染予防対策をするか不安を抱きながら実践していること、スタッフ間で新型コロナウィルス感染症への危機感の違いがあり、統一が難しいこともあげられていた。また、在宅での大きな特徴として、利用者が複数の施設やサービスを利用していることがあり、自施設以外で新型コロナウィルス感染症が発生した時の情報が共有されないため、感染拡大防止対応が取りにくいという困難さもあげられていた。

表 3　コロナ禍の実践において困っていること（自由記載）

困っていること	記述内容（一部改変）
感染予防具が不足している	・PPE が配布されず自費購入している
	・PPE 備品の貯蓄が不十分／不足
感染症対策が不安である	・実際の感染症対策についてこれでよいのか正解がなく不安
	・安全が保証されておらず不安
感染予防対策への認識の差がある	・コロナウィルスや感染に関するスタッフの感度がそれぞれのためある程度統一するために BCP が必要と再確認している
	・感染症対策に対して上司の危機感が薄い
感染予防対策の程度に迷う	・感染防御の程度についていつも迷う
	・疑いや発熱時の状態での予防対応の判断が難しいです
	・マスクをいつまで装着しなければいけないか
情報収集や相談のしづらさがある	・相談窓口やガイドライン、資料が探しづらい
	・相談センターの回答が期待していた内容でなく、結局事業所判断で動くことが多い
	・病院の研修に参加したが、在宅へのアレンジの必要があった
共有がされにくい	・地域の介護事業所内でコロナ陽性者が発生した場合に、情報共有が限定され拡大防止が難しい。個人情報を考慮しながら迅速な情報共有、連携が必要
利用者への不安の対応に悩む	・目に見えないウィルスに対する利用者の不安を払拭するにはどうしたらいか

今回のアンケート結果から、訪問看護師が新型コロナウィルス感染症への恐怖を抱えながら、限られた感染予防具や情報から手探りで工夫しながら看護実践していたことが伺えた。また、新型コロナウィルス感染症を始めとする感染予防対策や教育が自施設でどのように行われているかによって、訪問看護実践に影響を及ぼす可能性も考えられた。これらの結果を踏まえて、地域で実践する訪問看護師に対する支援について、関係機関と協働しながら引き続き検討していく必要がある。

関連研究業績

1. 水川真理子: コロナ禍における神戸市看護大学の地域連携, 大学地域連携研究 vol8, p49-56, 2021.
2. 水川真理子: コロナ禍で地域連携を再開する基準.第 9 回地域と大学を繋ぐコーディネーターのための研究実践セミナー. 指定講演. 2020/10/17.
3. 秋定真有, 坪井桂子（2020）. 看護大学が取り組む「もの忘れ看護相談」における活動報告―8 年間の活動の振り返りと今後の課題の検討―, 神戸市看護大学紀要, 24, 69－77.

2020 年度　地域連携教育・研究センター　組織

センター長　　片倉　直子

	氏名	所属
委員長	片倉　直子	基盤看護学領域　　基礎看護学分野
	片山　修	人間科学領域　　自然科学分野
	藤永　竜太郎	専門基礎科学領域　　医科学分野
	吉川　あゆみ	基盤看護学領域　　基礎看護学分野
	山下　正	健康生活看護学領域　公衆衛生学分野
	石橋　信江	健康生活看護学領域　老年看護学分野
	井上　ちはる	健康生活看護学領域　ウィメンズヘルス看護学分野
	半田　浩美	療養生活看護学領域　小児看護学分野
	丸尾　智実	療養生活看護学領域　在宅看護学分野
	水川　真理子	地域連携教育・研究センター

※なお、「第Ⅲ章 国際交流活動」については、以下の委員会の活動である。

国際交流委員会

	氏名	所属
委員長	加藤　憲司	専門基礎科学領域　　健康科学分野
	山内　理恵	人間科学領域　　言語科学分野
	クロスビ　アダム	人間科学領域　　言語科学分野
	山下　正	健康生活看護学領域　公衆衛生学分野
	嶋澤　恭子	健康生活看護学領域　ウィメンズヘルス看護学分野
	高山　良子	療養生活看護学領域　慢性病看護学分野
	樋口　佳耶	療養生活看護学領域　慢性病看護学分野
	片倉　直子	療養生活看護学領域　在宅看護学分野

神戸市看護大学　地域連携教育・研究センター
2020 年度　実績報告書

編集日　2021 年 3 月 31 日
発行日　2021 年 5 月 1 日
発行者　神戸市看護大学
〒 651-2103　神戸市西区学園西町 3-4
TEL 078-794-8080　FAX 078-794-8086

KOBE CITY COLLEGE OF NURSING
神戸市看護大学